

---

# 魔法少女リリカルなのは ~ FlameS ~

コーヤ豆腐

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはFlameS

### 【Nコード】

N6998P

### 【作者名】

コーヤ豆腐

### 【あらすじ】

すずかをなのは、フェイト、はやてのような魔法の力で守りたいと密かに思うアリサ。しかし、突如以前のような結界の中に迷い込んでしまったアリサ。そこで目にしたのはなのは達に傷つけられたすずかの姿であった。そしてアリサは決意とともに力を手にする・

## とりあえず設定（前書き）

小説を書き進めるにあたって、情報をまとめてみました。あくまで仮定なので変更する場合もあります。

## とりあえず設定

今のところの詳細設定

キャラ設定

アリサ・バニングス

魔力量クラス：???

魔導師ランク：非保有

変換資質：?

使用デバイス：?????

オリキャラ設定

イルミナ・アレイズ

性別：男

年齢：16歳

魔導師ランク：S-

魔力量クラス：AA

変換資質：氷

元時空管理局執務官

使用デバイス：ヴィゾーヴニル

詳細：3年前のとある事故で両親と妹を失っている。

アラストール

性別：-

年齢：--

魔導師ランク：---

魔力量クラス：---

変換資質：――

使用デバイス：――

詳細：アリサの持つデバイスに宿る意思。

種も仕掛けも無いそのまんま

## 第1話「事件の始まり」（前書き）

初めての投稿なので、少し変なところがあったりキャラの口調がおかしかったりするかもしれないので温かい目で見守るようにな読んでください。変なところがあれば指摘してもらえると幸いです。

## 第1話「事件の始まり」

闇の書事件の2年前・・・新暦63年

少年は焦土と化した街の一角に佇んでいた。涙を流しながら・・・

少年「どうしてこうなったんだよう！父さん！母さん！頼むから僕のところに戻ってきてくれよ！」

少年は叫ぶが誰にも聞こえはしない。自分が時空管理局の執務官であることも忘れ、地面に膝をついて泣きじゃくった。そして少年は憎しみを含んだ目で復習を誓った。自分の家族を殺した管理局への復習を・・・

闇の書事件から1年後・・・新暦66年

私立聖祥大付属小学校の4年B組の教室の中ではいつもど通りの平和な光景が広がっている。その中で一人、戦っている人間がいた。アリサである。彼女が今、戦っているのは睡魔だ。

《アリサ side》

アリサ（にしても眠いわねえ。どうしていつも管理局で仕事してるはずのなのはや、フェイト、はやてはあんなにピンピンしてんのかしら？まさか魔法とか卑怯な手を使ってんじゃないでしょうねえ。）

と、3人を睨んでいると、横の席のすずかが小声で話しかけてきた。

すずか「すごい怖い顔つきしてなのはちゃん達を睨んでいるけど、何かあったの？」

それに私は小声で応答する。

アリサ「なんもないわよっ。」

すずか「何も無かったら普通そんな顔しないと思うんだけど・・・」

アリサ「うっ、うるさいわねっ！なんもないったらなんもないのよっ！」

そこで困った表情をした先生から「そこ、うるさいぞ。しゃべるのなら周りに迷惑がかからないようにしてくれ。」と、注意を受ける。すると、教室中にクスクスと笑い声が広まった。少し声が大きかったかなあと、反省しているとふと、1人の視線に気がついた。はやてだった。

はやてはアイコンタクトでメッセージを送ってきた。

はやて（相変わらず、すずかとラブラブやなあ。はよ結婚してまえ）



アリサ（うつ、うるさいうるさい。べっ、べっにはラブラブ  
なんかじゃ・・・）

そうアイコンタクトを送り返すも、はやてはにたにたと笑いながら  
はやて（そう言いつつも耳まで赤いで。ホントは好きなんやろ？目  
まで泳いでるしバレバレや。）

と言って、はやては逃げるように体を黒板のほうへ向き直した。

アリサ（殺ってやる、もう我慢できない。放課後、今にみてなさい  
よっ！）

そう思い、アリサも授業に集中することにした。集中していたの  
で意外と早く時が過ぎて、気付けば放課後だった。アリサはすぐに  
はやて達のところに向かったが、はやて達は、なにか追い詰められ  
たような顔をして話し合っていた。

はやて「今、海鳴市・・・魔導師・・・潜ん・・・  
クラスAAや。次元・・・者・・・確率が高い。」

小声でよく聞き取れなかったが、確かにこう言った。今聞き取れ  
た内容でだいたい何を言ったかあたしにはわかった。たぶんこうだ  
『今、海鳴市に魔導師が潜んでる。魔力量クラスはAAや。次元犯  
罪者の確率が高い。』こんな感じか。まだ話し合いは続いているよ  
うだったが、何も知らないふりをしてその輪のなかに入り込んだ。

アリサ「三人で何話し合ってたのよっ。あたしも混ぜなさいよ。」

なのは「ふえ？ア・・・アリサちゃん？」

アリサ「みんなで何暗い顔してんのよつ。学校も終わったし遊ぶ？」

フェイト「今日は・・・ちよつと・・・あの・・・。」

はやて「すまんなあ。ついさっき管理局に呼び出し食らったんや。こっちも遊びたいけどなんかごめんな？」

アリサ「・・・なら仕方ないわね。じゃつ、また明日。」

三人「（うん）>ほなくまた明日>なく（ね）。」

《なのはside》

アリサ「・・・なら仕方ないわね。じゃつ、また明日。」

なのは「うん、また明日ね。」

アリサちゃんは踵を返してすぐかちゃんの所へ行きそのまま帰っていった。そこではやては

はやて「ほな、私らも帰るか。帰ってから搜索の準備や、んで3時半に臨海公園に集まる。」

なのは「うん」

フェイト「わかった」

そうして学校を出た私は、フェイトちゃんと一緒にそれぞれの家に帰った。

家の中には、恭也お兄ちゃんがいたので友達と遊んでくると、適当な理由をつけてフェレット状態のユーノ君と家を出た。門の前ではフェイトが待っていた。

なのは「フェイトちゃん、お待たせ。」

フェイト「ううん、そんなに待ってないよ。それじゃ行こ。」

なのは「うん」

臨海公園に着くとはやてちゃんとヴォルケンリッター達がすでに待っていた。

はやて「おっ、やっと来たか。なんや？手まで繋いでラブラブやな。はよ結婚してまえ。」

フェイト「まだ早いつて……。」

なのは「そうそう……ってフェイトちゃん結婚することに否定は無いの!？」

はやて「と、冗談はここまでにしておいてさっそく本題にはいるか。」

と、はやてちゃんの顔つきが変わった。隣でフェイトちゃんが「冗談だったの!？」と言いながら驚愕に目を見開いていたが、はやてちゃんはそれを無視して

はやて「さつき、シャマルに探査魔法かけてもらったんやけど。結果が著しくなくてなあ。」

と、はやてちゃんがポケットから徐に海鳴市の地図をとりだし、深刻な顔つきで話し始めた。

はやて「さっきの探査魔法で反応があったのはここら辺一帯や。」

と、言いつつはやてちゃんが地図に赤のペンで円を書き記した。半径で言うてほしい20cmくらいだ。地図は5万分の1の縮尺だから実際の距離で半径10kmくらいだと分かった。

だけど私には、はやてちゃんが何故こんなに深刻な表情をしているのか分からないかった。気になったので直接聴いてみた。

なのは「はやてちゃん、なんでそんなに深刻な顔をしているの?」

はやて「この円の中をよくみてみい。」

私とフェイトちゃんが地図を覗き込むと、フェイトちゃんが何かに気付いたように「はっ!」と声をあげた。

はのは「フェイトちゃんになにか分かったの?」

と、私が聴くとフェイトも深刻な顔をして衝撃の一言を全員に告げた。

フェイト「この円の中心は・・・アリサの家があるところ。」

この言葉に、この場の空気が凍りついた。

## 第1話「事件の始まり」（後書き）

次回でアリサを覚醒させたいけど・・・次の次かなあ。

## 第2話「二つのロストログア」（前書き）

一応、闇の書事件からちょうど1年くらいたっているので季節は冬です。

はやては自分で歩けます。

設定を大幅に変更しました。

## 第2話「二つのロストログア」

《なのはside》

なのは「でもでもっ、ただの偶然なんじゃないのかなあ?」

フェイト「そ、そうだよ。ただの偶然だよ。」

私とフェイトちゃんの会話を遮るかのようにはやてちゃんが口を開いた。

はやて「残念ながら、偶然とは考えられないんや。さっき、クロノから連絡があつたんや。管理局で保管されていたロストログアが2つ、何者かが盗んでいったらしいで。二つともそれぞれ危険度は少ないものの、ある『一定の条件』が揃うと世界の一つや二つは余裕で壊せるっちゅう話や。」

フェイト「その条件って?」

クロノ「遅れてすまない。そこからの説明は僕がさせてもらう。」

クロノ君がタイミングを見計らったかのように、アースラーから転移してきた。はやてちゃんは「いいとこ持って行きよって、私にしゃべらせんかい。」とクロノ君につっかかろうとしているが、シヤマルさんが「まあまあ」と言っではやてちゃんをなだめている。

クロノ「盗まれたロストロギア、名前はそれぞれ『贄殿遮那<sup>にえとのしやな</sup>』、『天壤<sup>てんじょう</sup>の劫火<sup>こっか</sup>』だ。『贄殿遮那』は刀の形をしている。そして『天壤の劫火』は、簡単に言えばネックレスだ。特徴は黒っぽい宝石の中に火の粉のような光がちらついている。この二つのロストロギアで一つのデバイスとして機能するらしい。」

なのは「それが『一定の条件』なの？」

クロノ「いや、違うな。それなら今すぐにも使って目的を果たしているはずだ。」

ユーノ「た・・・確かに・・・。」

クロノ「この二つのロストロギアを揃えるだけは誰にもできる。といっても、盗まれる前まで管理局に保管されていたから揃える事もできなかったが。」

ヴィータ「なあ、それで、『一定の条件』ってのは何なんだ？もったいぶらず早くしゃべってくれよ。」

クロノ「あ・・・ああ。『一定の条件』それはまずさっき言った通り、『贄殿遮那』と『天壤の劫火』を揃える事だ。」

クロノ君が一呼吸おいて、またしゃべり始めた。

クロノ「『一定の条件』そのうち最大の難関。それは『適合者』だ。何にせよ、すでに滅んだ世界の遺産だ。別の次元世界に『適合者』」



が一人もいなくてもおかしくは無い。だが、一人だけいたんだ。しかもこの世界に。」

フェイトちゃんが気付いたような感じで顔を上げたが、その考えを振り払おうと首を横に振っていた。私も多分、フェイトちゃんと同じ考えが浮かんでいる。

なのは「その『適合者』ってもしかしてアリサちゃん？」

私はその考えが間違っていると信じてクロノ君に聞いてみた。しかし、返ってきた答えはそのわずかな希望も打ち砕くような答えだった。

クロノ「その通りだ。僕も最初は信じたくはなかったが、調べれば調べるほどアリサが『適合者』であることが明らかになっていった。」

はやて「だから、偶然では無いんや。」

なのは「でもでもっ、その犯人の目的ってなんなの？」

クロノ「そこは予想でしかないが、たぶん管理局にアリサが連れて行かれる前に最後の『適合者』の抹殺か、アリサを使ってでの次元世界の破壊と殲滅だろう。」

なのは「抹殺って、早くアリサちゃんを助けないとアリサちゃんが・

・・」

クロノ「だが、やはりと言ってその可能性は無いな。それなら『贗殿遮那』と『天壤の劫火』を管理局から盗み出すという危険を冒す必要はないからな。だからと言って、後者もありえない。アリサが人を殺すような人間ではないことは誰でも分かっているはずだ。」

そのとき、私には考えがよぎった。

なのは「じゃ、じゃあ。もし漫画みたいに、アリサちゃんが洗脳されちゃったら？」

クロノ「それも無いと言うより、そんな術式は存在しない。そんな術式があれば世界中の人間が洗脳されてしまうし、術式で発動するならAMFで効力が無くなってしまふのは魔導師であれば誰でも知っている。」

なのは「あうう……。」

クロノ「犯人の目的が分からない以上、へたに行動するのはマズい。今は様子見をしてあまり動かないようにしたいんだが、異論は無いな？」

シグナム「ああ、そうだな。あまり一般人を危険にさらす訳にはいかないからな。」

シグナムさんがそう言った瞬間、結界がはられた。

クロノ「封時結界!？」

クロノ「あちら側から行動を起こすとは……。アリサの安全確保が優先だ!速く移動のできるフェイトはなるべく急いでアリサの元へ。」

フェイト「うん、わかった。バルディッシュいくよ。」

(Yes, Sir!)

フェイトちゃんの服がバリアジャケットに変わり、続いてソニックフォームへと変身して颯爽と飛び立った。

クロノ「僕たちも続いて行くよ!」

クロノ君の声とともに私たちもバリアジャケットを装着、そしてアリサちゃんの元へ飛び立った。

## 第2話「二つのロストログア」（後書き）

もしかしたら次でアリサが覚醒するかもしれません。予定です。  
あまり期待しないでください。正直自分は文系の成績が壊滅的だった  
ので変な分とか普通にはいってると思います。

### 第3話「イルミナ・アレイズ」(前書き)

すみません、少し日が空いてしまいましたね。

### 第3話「イルミナ・アレイズ」

#### 《フェイトside》

フェイト（はやく・・・はやくアリサの元に・・・手遅れになる前にっ！）

私は今、空を高速で飛んでいる。私のはるか後ろをはなのは達がついて来ているのを確認して前方を見ると、空中に何かが浮かんでいるのが目に留まった。近づくにつれてそれは人の形をしているのが分かった。性別は男のようで、真珠のような色の髪は背中まで伸ばしてあり、それを後ろで束ねている。バリアジャケットを着ているところ魔導師で間違いないだろう。と、軽く推察する。そして、その男は背中に布で包まれた、だいたい1mくらいの長さの何かを担いでいる。その中身はおそらく『贄殿遮那』であろう。こんな所で、そんな長さのものを持っているとしたら『贄殿遮那』であると考えるのが自然だろう。

フェイト「時空管理局囑託魔導師フェイト・T・ハラオウンです。すぐに『贄殿遮那』と『天壤の劫火』の二つのロストロギアをこちらに引き渡してください。そうすればあなたにも弁護の機会があります。」

私はそう告げると、バルディッシュを男に突き出した。だが、男はそれを鼻で笑い、そして口を開いた。

「??? 危険を冒してまで手に入れたものをそう簡単に渡すと思うか？」

フェイト「早く渡しなさい！さもないと・・・」

「??? 「さもないと？」

フェイト「公務執行妨害および遺失物不正所持の現行犯、遺失物窃盗の容疑であなたを逮捕します！」

「??? 「ハッハッハッ！こいつは傑作だ！相手の力量も知らずよくそんな事が言えるな。やれるものならやってみろ！力づくでなあ！いくぞヴィゾーヴニル！」

(Yes / Sir!)

フェイト「行くよ、バルディッシュ！」

(Yes / Sir!)

男の持つデバイスは最初、腕輪の形をしていたが男の声とともに1.5mの黒い棒状に伸び、上の先端部から刃が飛び出した。刃の中心には真珠色に輝く六角形の宝石が埋まっている。

二つのデバイスの柄の部分がぶつかり、鈍い音とともに火花を散らしている。

フェイト（やっぱり、力押しじゃ勝てない。力が駄目なら頭を使って・・・）

私は一旦男から離れて、様子を見る。男はどうやら動く気配が無くこちらを不審そうに見つめている。

???「どうした？かかってこないのか？」

フェイト（相手の挑発に乗っては駄目だ。考えなきゃ・・・どうやって勝つかを・・・）

フェイト「よしっ！」

作戦はだいたい決まった。別に相手を倒さなくてもいい、捕まえて動けないようにすればいいんだ。私はそう考え、作戦のためまず相手の動きを確かめる攻撃に移る。

フェイト「プラズマランサー・・・ファイア！」

私はそう言って、プラズマランサーにわざと隙間を空けて30発同時に放つ。

???「そんな甘い攻撃は当たらない。」



男はそう言う、必要最低限の動きで隙間のある左側へと体をそらした。私は作戦に気付かれないように、プラズマランサーを爆散させる。確認のためもう一度プラズマランサーをわざと隙間を空けて30発放つ。

そうすると予想どおり、相手は必要最低限の動きで隙間に避ける。

フェイト（相手の動きは分かった。これで勝てる！）

私はそう考え、相手の真上に気付かれないようにバインドを仕掛ける。

フェイト「プラズマランサー・・・ファイア！」

???「3度目の正直とよく言うが、これは2度あることは3度あるだな。」

男はそう言いつつ、必要最低限の動きでバインドを仕掛けてある真上に体をずらした。

フェイト（！・・・掛かった！）

男が移動した瞬間バインドが発動、男を縛り上げる。そして通り過ぎたプラズマランサーが方向転換し、男に直撃する。

「???」「ぐあぁっ!?!まさかここまでやるとは……」

男がそう言った所で、クロノ達が追いついた。

クロノ「時空管理局執務官クロノ・ハラウンだ。管理外世界での魔法の使用および遺失物違法所持の現行犯で逮捕する!」

「???」「おやおや、管理局の執務官まで来るとは……まあこれも計算内だったか……。」

クロノ「貴様、名を名乗れ!」

「???」「俺か?俺は元時空管理局執務官イルミナ・アレイズだ。」

クロノ「イルミナ……アレイズ……だと!?!」

イルミナ「いかにも。この俺がイルミナ・アレイズだ。」

クロノ「そんな……馬鹿な……だって……死んだはずじゃ?」

フェイト「クロノどうしたの?イルミナ・アレイズって?それに元時空管理局執務官?」

クロノの話によると、イルミナ・アレイズとは9歳という若さで、一度も試験に落ちず執務官になったと言う天才らしい。何より、魔

力量はA Aでさらに魔力変換資質の中でも特に希少な凍結を持っている、生まれながらにしての超天才だったらしい。だが、3年前の  
とある事件のあと行方不明になり、それ以来管理局内では死亡して  
いることになっているらしい。

イルミナ「まったく、勝手に殺してもらっては困るな。」

フェイト「元執務官なら、今あなたのしていることがどれだけ重い  
罪なのか分かっているはず！」

イルミナ「分かっているさ。俺はそれを承知の上で今まで準備を進  
めていたんだからな。」

そこで、状況がよく掴めていないなのはが痺れを切らしたように  
口を開いた。

なのは「とりあえず、よく分かんないけど早くそのロストログアを  
渡してほしいの！」

ヴィータ「そうだ！さっさと渡しやがれ！」

そこでシグナムも無駄話はもう終わりだといった感じで、イルミ  
ナに向かって言葉を放つ。

シグナム「今この状況下で我々から逃げられると思っているのか？」

そこでイルミナが不適に笑い出した。

イルミナ「ただで逃げられるとははじめから思っていない。まあこの状況も計算の内だったからな・・・手は打ってある。」

イルミナが拳に力を入れると同時、彼を縛っていたバインドが凍りだした。

クロノ「なっ・・・！だがこの戦力差では逃げられないっ！」

イルミナ「それはどうかな？」

イルミナが指をパチンと鳴らすと、イルミナの横から群青色の魔方陣が現れ、さらにそこからバインドで縛り上げられた少女が現れた。

その姿に、一同は言葉をなくす。バインドに縛り上げられた少女それは・・・

なのは「すずかちゃん!？」

月村すずかだった。

### 第3話「イルミナ・アレイズ」(後書き)

まだ、アリサが覚醒しない・・・次話でいけるかな？

#### 第4話「真実」(前書き)

あけましておめでとう、今年もいい年になるといいですね。  
設定を少し変えました。気付きました？

## 第4話「真実」

### 《アリサside》

時間は遡って、学校の教室。

アリサ「・・・なら仕方ないわね。じゃっ、また明日。」

なのは「うん、また明日ね。」

そう言ってなのは達と分かれたあたしはさすがと一緒に下校することにした。

アリサ「なーんか。さっきなのは達の反応・・・引っ掛かるのよねえ。」

すずか「そう？私にはそうは見えなかったんだけどな。」

アリサ「なーんか隠し事してるみたいだったんだよね。なのはは隠し事得意じゃないから顔見ただけで一発、丸分かりよ！」

すずか「アリサちゃんは鋭いね。私にはぜんぜん分かんかったよ。」

アリサ「すずかは鈍すぎなのよ！」



すずか「そんなことないよ。」

アリサ「だって、あたしの気持ちに気付いてくれないんだもん。」

すずか「え・・・？何か言った？」

アリサ「何も言っていないわよ！さっ、帰りましょ！」

すずか「えっ？絶対何か言ったでしょ？おっしっえって。」

こんな感じで普段と何も変わらない日々を送っていた。いつまでもこんな時間が長く続けば良いなあと、思いながら鮫島の待つ車までずずかと一緒に歩いた。

だが、その変わらない日々が一瞬にして崩れ去ることになるとは誰も思いもしなかった。アリサにも、すずかにも、もちろんのは達にも・・・

《すずか side》

すずか「それじゃあ、アリサちゃんまた明日ね。」

アリサ「うん、また明日。」

アリサちゃんにそう言つて、車を運転してくれた鮫島さんにもお礼を言う。鮫島さんは「いえいえ、礼には及びませんよ。」と笑顔で答えてくれた。アリサちゃんを乗せた車が月村邸から離れていくのを見送っていると、ノエルさんが声をかけてきた。

ノエル「すずか様、お外に出ているのは風邪を引かれます。早く邸の中へ入りましょう。」

すずか「はいっ。」

そうして私はノエルと共に邸の中に足を踏み入れた。時間が気になり、ふと時計を見てみると、今はちょうど3時半だった。特にすることも無いので、今日課された宿題と明日の授業の予習をしておくことにした。

気付くと時計は4時をすこし過ぎたところだった。

すずか「もう4時・・・宿題は5分で済んじゃったし、予習ももう十分。暇だなあ。」

私がそう呟くと、まだ明るかった空が突然暗くなった。と同時に邸から人の気配が消えうせた。以前にもこんな経験があった気がして窓から外の景色を眺めてみた。

すずか（この感じ、去年の冬と同じ・・・でもまたなのはちゃん達が何とかしてくれるはず。）

私はそう思い、また窓の外へ目を向ける。しばらくして遠くで金色の光が飛んでくるのが見えて、突然その光が止まったように見えると、そのすぐ近くで爆発が起こった。

すずか（あの金色の光はフェイトちゃんかな？でも確かあの辺はたしか・・・アリサちゃんの家のすぐ近く！！！！）

すずか「アリサちゃんが危ない！早くアリサちゃんの元について無事が確かめないと・・・。」

そしてすぐにコートを着て、外へと飛び出した。

道のりにして約1？だいたい10分くらいかなと考えながらアリサちゃんの家へ走って行った。走っている途中に爆発が止み、ピンクや青や白などの光が金色の光に集まっていく、それに気を取られていて気付かなかった。足元に光る群青色の魔方陣に・・・。

私は気付いたのが遅くて気付けば手足は縛られ、強い光と共にどこかへと飛ばされた。

すずか（アリサちゃんの言う通り、私は鈍いのかな・・・。）

《アリサside》

ずかを車から降ろしたあと自宅に到着した。鮫島がいつものようにドアを開け、あたしはいつものように車から降りる。家の中に入るとあたしはすぐに自分の部屋に向かった。

時計を見ると3時40分だった。宿題をする気も起こらず、あたしはテレビゲームをすることにした。いろんなアニメキャラが出てくる格闘ゲームだ。あたしのお気に入りは『シャナ』っていうキャラクター。詳しいことは良く分かんないけど、刀とかが使いやすい。そうやってゲームに集中しているといきなり電気が消えた。

アリサ「あああつ！今いいとこだったのにっ！なによーっこんなときに停電なんて電力会社はなにやってんのよーっ！」

あたしは邸内に響くほどの大声で叫ぶ。だが、誰も来る気配がない。

アリサ「誰かー、誰かいないのー？鮫島ー？」

アリサ（おかしいわね、誰も来ないなんて。家の中には絶対誰か一人はいるはずなのに・・・。）

と、思ったが周りからは物音一つ聞こえない。まるで、この邸にはアリサ一人しかいないような、そういった感じだ。たしかこういった経験は以前にもあった。それは去年のクリスマス・イブの出来事だ。そしてその日は初めてなのは達が魔法使いであると知った日だ。

もあり、自分のあまりの無力さを悔やんだ日でもあった。

アリサ（また、なのは達がうまくやってくれるでしょ。別にあたしが関わることもないし……。）

そのとき、突然近くで爆発音が聞こえた。窓から外を覗くと、金色の光と人影が戦闘を始めている。金色の光はすぐフェイトのことだと分かり、人影は今の状態の犯人であることも分かる。あたしは今日の放課後の隠し事がこの事だったのかと思いつ返す。

アリサ（だけどその前に……。）

アリサ「あたしん家の近くでやんなくてもいいでしょうがっ！」

怒鳴っても誰にも聞こえていないことは分かっていたが、怒鳴らずにはいられない。もし自分の家に流れ弾が当たったらと、考えるといてもたってもいられない。それにもし自分のところに流れ弾が来ればひとたまりもないだろう。なのでとりあえず安全そうな場所へ避難することしようと思ってドアノブに手をかけた。

が、ドアノブが回らないことに気がついた。

アリサ「あ……あれ？ど……どうなってんのよ？なんでドアノブが回らないのよ!？」

どれだけ力を入れても回りそうにない。

アリサ（こうなったら、ドアに体当たりしてドアを壊すしかないわね。壊れた理由なんてなんとかなるわよ。）

アリサ「いち、にの、さん！」

あたしは思いっきり飛んでドアに突撃する。が、今度はドアの前で体が止まり、そのままゆっくりと床に降ろされる。

アリサ（多分魔法がなんか掛けてあるんでしょうね。これじゃあどうしようもないわ。）

あたしは諦めて、ソファに座り込んだ。

アリサ「やっぱあたしって無力だなあ。」

そう思っていると、足元に群青色の円が出現した。とっさに離れようとしたが遅かった。光と共にどこかへと飛ばされた。

《イルミナ side》

なのは「すずかちゃん!？」

イルミナ「今、魔法で眠らせてある。」

ヴィータ「人質とか卑怯だ!」

イルミナ「ふつ、争いに卑怯もクソもあるものか。俺はここで捕まる訳にはいけないのでな、いちいち手段なんか選べるはずもなからう。」

シグナム「くっ!」

イルミナ「もし動けば、どうなるか分かっているな?」

イルミナ（ふつ、動いても動かなくても結末は同じだ。アレの覚醒を促すにはこれが一番手っ取り早い。）

俺は遠隔転送魔法をもう一度発動してアレをここから50m離れた場所に連れ出す。さらにアレに幻術魔法を掛けることも忘れない。

イルミナ「準備は整った!俺の計画が今この瞬間から始まる!」

なのは達「!？」

イルミナ「この少女を生贄にして、古代ベルカの力を目覚めさせる。」

イルミナ・アレイズは月村すずかの背中に手を当て詠唱をはじめ  
る。

クロノ「やつ、やめろおおおおおおおお！」

クロノ・ハラオウンが叫びながらイルミナ・アレイズに向かって  
飛び出す。その甲斐もなく、ぐさりと肉を貫き通す音が鳴り響き、  
月村すずかの体から鋭い氷の槍が突き出てきた。そこからは赤い液  
体がぼたぼたと垂れてきている。

《なのはside》

私は動くことができなかった。親友であるすずかちゃんが目の前  
で鮮血に染まっていくのをただただ見ていることしかできない。手  
足が震え、吐き気が止まらない。周りのみんなは目を見開き、驚愕  
という感情を顔に貼り付けている。

クロノ「貴様ああああああっ！」

クロノの叫びでみんなが正気に戻る。

鼻で笑いながらイルミナがすずかちゃんを放り投げた。迷わず私  
はすずかちゃんを受け止めるために飛び出す、フェイトちゃんもは  
やてちゃんも考えは同じようだった。



なのは「すずかちゃああん！」

ギリギリセーフですずかちゃんをキャッチした私は、すずかちゃんにまだ息があることを確認した。安心したところでフェイトちゃんとはやてちゃんの方に振り返ると、二人とも驚きを隠せない様子で私の方を見ていた。正確に言うと、私の後ろを見ていた。なので私は振り返り二人の視線の先を確認する。そこにいたのは・・・。

なのは「アリサちゃん？」

すずかちゃんと私達どちらともにとって親友と呼べる存在。アリサちゃんであった。

## 第4話「真実」(後書き)

次こそはアリサを覚醒させたいです。

## 第5話「嘘」

### 《アリサside》

あたしが気付いたとき、道路の上に立っていた。上の方からなにやら話し声が聞こえてくる。

????「人質をとるなんて卑怯だぞ！」

真珠色の髪をした男がそう言った。

????「君が黙って我々について来れば月村すずかに害は加えない。」

アリサ（えっ？あれってクロノ？周りにはヴォルケンリッター達やなのは達もいる！？）

ヴィータ「そうだ、だけどこんなやつ人質にとっても無意味じゃないか？」

クロノ「それもそうだな。こんな足手まとい居るだけで邪魔だ。」

男「やめろおおおおおおお！」

あたしは見た。クロノがすすかの背中に手を当て、術を発動、そして氷の槍がすすかを鮮血に染め上げる様を。そしてクロノがすすかをこちら側に放り投げてこう言った。

クロノ「なのは、フェイト、はやて死体処理しろ。」

三人「了解。」

そして、三人がこちらに向かって来る。逃げようにも逃げられない。親友と思っていた人間が親友が殺されたのを見て何も感じていない。その恐怖があたしの体中に溢れて、より体を動けないようにしている。

なのは「あ……。アリサちゃん居たんだ。」

フェイト「見ていたんだね。ずっと……。」

はやて「……………」

気付かれてしまった。あたしの体の震えが止まらない。体が動かない。でも口は勝手に動く。

アリサ「あ……。あんた達、何も感じないの？思わないの？だつてすすかが……。すすかが……。すすかが死んじゃったのに、何でそんな涼しい顔して立ってられんのよっ！」

それになのは達が答えた。絶望的な答えをアリサに言い渡すために。

なのは「こんな足手まとい死んで当然だよアリサちゃん。」

フェイト「なんの力もないのに、飛び出してくるからこうなるんだよ。」

はやて「正直邪魔やったわ。あんたもすずかも守られてばかりで、少しは守る側の事情ってのも考えたらどうなんや。」

あたしは言葉を失った。あまりの絶望感に心身ともに追いつかない。頭がだんだんクラクラしてくる。だんだんと意識が遠のいていく。意識を失う寸前男の声が聞こえた。

男「この娘だけはやらせない。」

そしてあたしは意識を失った。

《なのはside》

私の目の前にはアリサちゃんが居た。驚愕に目を見開いている。

フェイト「アリサ……。ごめんずかを守ることができなくて……」

はやて「…………ごめんな。」

二人が口々に謝罪の意を述べる。しかし、アリサちゃんはその言葉がまったく聞こえてないような感じで動かない。と、思っていたらいきなり口を開いた。

アリサ「あ……。あんた達、何も感じないの？ 思わないの？ だってすずかが……。すずかが……。すずかが死んじゃったのに、何でそんな涼しい顔して立ってられんのよっ！」

三人「…………えっ？」

私達にはアリサちゃんの言っている意味が分からなかった。すずかちゃんにはまだ確かに息がある。それなのにアリサちゃんは今、死んだと言った。明らかにアリサちゃんの様子がおかしい。そう考えたとき、ドサリとアリサちゃんが倒れた。

なのは「アリサちゃん!？」

私が叫ぶと同時にはやてがアリサちゃんのところに向かう。

はやて「大丈夫や。気を失っただけや。」

その瞬間、ドガツという打撃音とともにはやてが突き飛ばされた。

はやて「な・・・なんや？」

突き飛ばした張本人はイルミナ。

イルミナ「この娘は貴様らなどには渡さん。俺にとって大事なモノなのでな。目的は果たした。御暇させていただく。」

そして、私達が駆け寄るよりも早くどこかへ消えてしまった。

なのは「すずかちゃんだけじゃなくアリサちゃんも助けられなかった・・・。」

ユーノ「・・・・・・・・・・。」

フェイト「くっ・・・・・・・・。」

はやて「私が早くアリサを連れて行けばこんなことにはならなかったんや！くそっ！なにが夜天の書の主や！守るための力じゃなかつ

「たんか!？」

シグナム「主の友を傷つけてしまうなど、ヴォルケンリッター失格だ……。」

ザフィーラ「この体たらくでは、守護獣の名が泣く!」

ヴィータ「ちつくしよおおおおおおお!」

クロノ「こんな程度の力でよく僕は時空管理局の執務官なんてやっていられたものだ。」

みんな口々にたくさんの怒りと後悔を自分にぶつけている。

こうして事件は始まった。月村すずかの重傷と、アリサ・バニングスの誘拐で。



## 第5話「嘘」(後書き)

作者「以上でプロローグはお終い、次からや々と本編だっぜ！」

アリサ「ちょっと！？プロローグ長すぎなんじゃない！？いい加減読者もあきれて別の小説読んでんじゃないの！？」

作者「はっはっは、スマンwww」

アリサ「笑って済ませられることじゃないわよっ！このばっく！」

作者「もっと馬鹿って言って〜。」

アリサ「バカバカバカバカバカバカバカバカバカばあああああつ！」

作者「もっともっと〜と。」

ザフィーラ「こいつキモイな。」

作者「うっせー！」

## 第6話「『宝具』」（前書き）

作者はヴォルケンズが大好きです。ヴォルケンズの中でランク付けするなら

一位シグナム、二位ザフィーラ、三位ヴィータ、同じく三位シャマルです。

## 第6話「『宝具』」

月村すずかが重傷を負い意識不明の重体になり、アリサ・バニングスが誘拐された日の翌日。

《なのはside》

今日の朝はなかなか起き上がることができなかった。眠れなかったのだ。無理もない、昨日あれだけのことが起これば誰だって精神に異常をきたす。

すずかちゃんとアリサちゃんは交通事故で、二人とも意識不明の重体で県外の最高の設備が整った病院に入院したとなっている。実際は、すずかちゃんはミッドチルダの医療施設で治療を受けていて、アリサちゃんは生死不明の行方不明である。

キンコンカンコンコン

授業の終わりを告げるチャイムが鳴る。正直、授業の内容は殆ど頭には残っていない。午前の授業が終わりクラスメイトが弁当を持ってお昼ご飯を食べに行く中、三人だけ全く動こうとしない。まるで魂が抜けたように目が虚ろになっている。そこにクラスメイトが話しかける。

クラスメイトA「大丈夫だって、二人は必ず助かるって。だからそ

んなに気を落とすなよ。お前らしくねーぞ。」

クラスメイトB「そうそう、それに交通事故なんだから、別にあなた達が後悔するようなことはなにもないよ。ほら、笑って笑って。」

私達に気を使って、励ましてくるクラスメイト。するとはやてちゃん顔をあげて口を開く。

はやて「せやな。落ち込んでたって別にすずかちゃんとアリサちゃんも帰って来る訳がない。そんなら、いつ帰ってきててもええように私は笑って待ってればええんや。すまん気使わせてもうて。ほら、なのはちゃん、フェイトちゃん分かったら顔あげんかい。」

フェイト「そうだね。」

なのは「うん・・・じゃあお弁当食べようか?」

はやて&フェイト「うん!」

そうして、談笑しながらお弁当を口に運ぶ。笑ってはいられないが後悔していたってなにも帰ってこない、だから気持ちを切り替えて今は笑ってしようと、三人で決めた。この学校の中では・・・。

キンコーンカーンコーン

午後の授業の終わりを告げるチャイムが鳴る。今日は金曜日で明日は土日。クラスメイトのみんなは「また来週。」といって帰路についている。週が明けた水曜日は終業式でそこから冬休みに入る。私達三人は今一緒に帰路についている。

はやて「明日、明後日は学校は休みや。なんとしてもアリサちゃんを見つげ出すんや！」

フェイト「でも、あれから魔力反応は一切検出されてないよ。さっきエイミィから通信で訊いてみたんだ。もちろん海鳴市周辺の都市にも範囲を広げての搜索もしたけど引つ掛から無かったって言うた。」

なのは「うーん。でも、もしかしたら別の世界に転移しているかもしれないよ?」

今は念話会議中である。一般人に聞かれるのも嫌なので念話で会議をしている。「嫌な理由は言うまでも無かるう」 会議の参加者はなのは、フェイト、はやて、リンディ提督、クロノの計5人である。

クロノ「その線もあるな・・・なにせ相手の目的が未だはつきりしないからな。アリサ・バニングスを使ってでの次元世界破壊をするなら地球に居る意味もないしな・・・。」

はやて「次元世界単位での搜索はやってるんか？」

クロノ「今、管理局で総勢を挙げて搜索している。」

なのは「か・・・管理局全体で!？」

リンディ「当たり前じゃない。なんたつて、下手したら次元世界の  
一つや二つ余裕で破壊できるほどの力よ。管理局が放って置く訳無  
いじゃない。」

クロノ「だが・・・まだ完全に『贄殿遮那』と『天壤の劫火』につ  
いての完全な詳細データは判明していない。昨日話したことはもし  
かしたら間違っている可能性もある。」

フェイト「それじゃあアリサが『適合者』だつて言うのは・・・」

クロノ「残念だがそれに間違いは無い。今、完全な詳細データに関  
してはユーノに調べてもらっている。」

リンディ「それと、あなた達三人はお家に帰り次第アースラまで来  
ること。はやてちゃんはヴォルケンリッターも連れて来てね。これ  
にて会議はお開きとします。」

三人「はいっ!」

そしてアースラ会議室にて

クロノ「みんな集まったな。これから今後の対策として会議を始め

る。」

クロノ君がそう言って会議を始める。ヴォルケンリッターの人は昨日の一件から立ち直っている様子なので一先ず安心。

クロノ「さっきユーノから通信が入った。どうやら情報を掴んだようだ。その情報を踏まえて会議を進めて行こうと思う。それじゃあユーノ、説明頼んだ。」

ユーノ うん。それじゃあ説明に入るね。まずは『贄殿遮那』と『天壤の劫火』の関係について話すよ。『贄殿遮那』と『天壤の劫火』これが二つで一つのデバイスであることには間違いない。そして本体は『天壤の劫火』であることが新たに分かった。それも融合型デバイス。そして『贄殿遮那』はロストロギアではなく、正確には『宝具』と呼ばれるものらしいんだ。そしてその『宝具』は『贄殿遮那』一つだけではないことも分かったんだ。でも『贄殿遮那』自体にもその他の『宝具』に関しても詳細な記述はされていなかったよ。

なのは「でもでもつ、ロストロギアとその『宝具』って何が違うの？」

ユーノ いい質問だね、なのは。ロストロギアって言うのはそれ単体に何らかの力があるでしょ。例えば、ジュエルシードは一つだけでも次元震を起こすほどの力を持っている。でも、その『宝具』っていうのは記述によると使用者の魔力を消費して力を発揮するらしいんだ。

クロノ「だが、それくらいの物は何処にでもあるはずだ。なんならデバイスを『宝具』といってもいいんじゃないか？」

ユーノ それはちよつと違うかな。『宝具』はデバイスのような変形を行わないし、魔力を込めれば絶大な力が発揮される。

私は『宝具』について大体理解したが一つ気になることがあるので、ユーノ君に訊いてみた。

なのは「じゃあ、『天壤の劫火』はなんなの？ロストロギアなの？」

ユーノ ああ、それはあつてる。けど、『天壤の劫火』にはクセがあつて『天壤の劫火』が力を発揮するのではなくて、『適合者』が力を発揮するんだ。だけど『天壤の劫火』自体にも力があるのは管理局の調査で分かっているんだ。けど・・・

フエイト「そこがよく分からないだね。」

ユーノ そうなんだ。どんな古い文献を調べてみても書いてあることはほとんど同じ・・・それに文献の数も少ない。以上が僕の調べで分かったことだ。あまり力になれなくてゴメン。

なのは「そんなことないよ。ユーノ君頑張ってくれてありがとう。」

ユーノ あはは・・・ありがとう。

クロノ「じゃあ今後の対策についてなんだが・・・」



と、クロノ君が言いかけた途端、艦内にブザーが鳴り響いた。

はやて「な・・・なんや!？」

シグナム「敵襲か!？」

ここで、エイミーさんから通信が入った。

エイミー 海鳴市上空に魔力反応、推定Aランク。もしかしたら昨日のヤツかも・・・それと一緒にアリサちゃんの生体反応をキャッチしたよ!

私達は急いでアースラのブリッジに向かった。

## 第6話「『宝具』」（後書き）

作者「相変わらずのこの不定期更新いつか更新が途絶えてしまうのか……。」

アリサ「それだけは勘弁して、あたはまだ活躍してないんですけど・・。」

ザフィーラ「俺もだ。」

シグナム「レヴァンティンが血を欲している。」

シャル「治療したい、手術したい・・ハアハア。」

ヴィータ「この二人ヤバイ。目が血走ってる。」

シグナム「演技だ。」

シャル「冗談です。」

作者「こいつらの演技力パねえ」

アリサ「話を逸らすな！」

作者「ごめんなさい。更新はちゃんと続けますよ。相変わらずの不定期更新になると思いますが・・。よろしくおねがいます。」

## 第7話「天壤の劫火」

《なのはside》

ブリッジに全員集まったことを確認してリンディさんが話し始めた。

リンディ「先ほどエイミィからの報告どうり、イルミナ・アレイズと思われる魔力反応とアリサちゃんの生体反応が海鳴市上空に現れたわ。一刻も早くアリサちゃんを保護しましょう。イルミナの確保はその次よ。みんな行つてらっしゃい。」

クロノ「かあ・・・提督、他の魔導師部隊は？」

リンディ「今こちらに向かっているわ。あと数分で到着よ。」

クロノ「分かった。みんな今すぐ出るぞ。」

一同「はいっ！」

そして私達は転送ポートまで行き、海鳴市上空に転送された。

《イルミナside》

今自分の目の前に、魔導師8人と小さいのが1人転送されてきた。俺の横にはアリサ・バニングスが立っている。決意に満ちたいい表情をしている。

イルミナ（だが、まだあと少し足りんな。あの提督が出てこれば足りるんだが……。しょうがない、あと数分もすれば魔導師部隊が来るはず……。時間を稼ぐか。）

考え事に耽っていると、正面で誰か叫んでいる。たしか名前はクロノ・ハラウンとか言ってたやつだ。

クロノ「こちらにアリサ・バニングスを引き渡すんだ！君が何をしているか分かっているのか！？」

イルミナ（ははっ、その言葉は逆にアリサの神経を逆撫でするぞ。ほら、アリサの顔が憎しみでいっぱいだ。）

イルミナ「別に俺は彼女を拘束しているわけじゃない。見れば分かるだろう。」

そこで確か昨日フェイト・T・ハラウンと名乗った少女がアリサに向かって声をかける。

フェイト「アリサ、早くこっちに来て！その男は危ないよ！」

イルミナ（アリサにとって怖いのはお前らの方だ。今から貴様らに絶望を植え付けてやる。）

イルミナ「アリサ、行きたいのなら行け。お前の好きにしろ。」

俺がそうだった途端、やつらの表情が明るくなった。だがそこまでだ。

アリサ「嫌だ。向こうには行きたくない。あたしはアレンという。」

アリサが言葉を放つ。やつらは訳が分からないといった様子で明らかに動揺している。

イルミナ（当然の結果だ。）

俺は心の中でほくそ笑んだ。

クロノ「貴様いったいアリサに何をした！」

イルミナ「俺は何もしていないさ。彼女の意思だ。目を見ても。」

アリサの目には一点の曇りもなく、洗脳されている様子は全く窺えない。と、そこに封時結界がはられる。おそらく魔導師部隊の到着だろう。

イルミナ（ようやく来たか。そろそろ始めるか。）

イルミナ「アリサ、今から君の力を開放する。覚悟はできたかい？」

アリサ「覚悟なんてとつくの昔にできてるわよ。早く始めなさい。」

クロノ「力を・・・解放だつて？」

イルミナ「そうだ。アリサには元々魔力資質がある。」

クロノ「そんな筈は無い！管理局でもデータが出ている。」

イルミナ「ちゃんと調べたのか？アリサに封印魔法が掛けられていることを。」

クロノ「封印・・・魔法？」

イルミナ「君達は知らないようだが、俺が管理局で真面目に働いていた頃に知ったことだ。どうやら管理局の暗部の仕業らしいが・・・アリサにはそいつらによって何重もの封印魔法が掛けられているんだ。それを今・・・開放する。ここに居るすべての魔導師の魔力を使つて！」

クロノ「なにっ！？だからわざわざここまで出てきたのか！？くそっ、シャマル、すぐに転送の準備を・・・。」

イルミナ「無駄だ。もう遅い。起きろヴィゾーヴニル仕事だ。ブレイク・ア・シール！」

(Yes, My master. Break A Seal!)

俺が長年の努力を重ねて作り出した、封印強制破壊の術式を発動させる。それと同時にアリサの胸元から弱く光るリンカーコアが現れた。そしてアリサの目の前に握り拳と同じくらいの群青色の球体が現れる。そこから俺を含めた結界内の全ての魔導師に向けて太さ1cmの紐が放たれる。だが、それに抵抗しようとクロノが味方全員にシールドをはる。

イルミナ「はっはっは！抵抗は無意味だ。元々封印や結界の破壊を目的とした術式なんだ。シールドごときで防げるはずが無い。」

クロノの抵抗も虚しく、魔導師全員の胸元に紐が張り付く。そして魔力が群青色の球体に吸われていく。

イルミナ「こいつは魔力を全て吸い尽くすまで止まらん。安心しろ死ぬことはない。現に俺も吸われているからな。ただ、尋常じゃない疲労感が後から来る。アリサ後は頼んだぞ。」

アリサ「分かった。」

そう言っている間に魔力を全て吸い尽くした。もちろん全員既に地上に降り立っている。俺は袋の中から『贄殿遮那』と『天壤の劫火』を取り出す。すると、その二つがアリサの目の前に浮遊し、『天壤の劫火』が燃え盛るように光出す。

トクン・・・トクン・・・

群青色の魔力球がアリサのリンカーコアと『天壤の劫火』を管で繋ぐ。すると『天壤の劫火』から声が聞こえてくる。

天壤の劫火「我が名は天壤の劫火アラストール。まさか、この世にまだ私を収められるほどの力を持つものが居ようとは・・・。」

アリサ「あたしの名前はアリサ・・・アリサ・バニングス。」

アラストール「アリサ・バニングスカ・・・ところでアリサは私の主となる身か？」

アリサ「そうよ。」

アラストール「よからう。私の主となるには十分すぎる力だ。君に掛けられている封印魔法はもうじき解ける。それまでに契約を済ませよう。それでは、君の手で私に触れてくれ。」

アリサ「うん。」



アリサがアラストールに触れた。

## 第7話「天壤の劫火」(後書き)

作者「相変わらずの駄文だな。うんうん。」

アリサ「自分で言っで自分で納得するな。」

作者「そう言っても本当なんだからしかた。」

ドガッ

アリサ「あんたなんて知らないっ!」

作者「そ、そんな。行かないでくれ、そして嫁」

ザフィーラ「駄目駄目だな、この作者。」



アリサ「ゆ・・・夢？いや・・・違う。」

自分の部屋とは全く逆で何も無いただの白い部屋の中のベッドの上であたしは寝ていた。遠くからは話声が聞こえる。

???「ああ、成功した。問題ない・・・今寝かせてある。ああ、分かっているさ。そちらは？・・・そうか順調だな。・・・それはまだだ。今日実行するつもりだ。おや・・・いやなんでもない。起こしてしまったようだ、これで切るぞ。ああ、じゃあな。」

ピッ

???「目が覚めたか。起こしてしまったか？」

アリサ「うつん・・・あなたは誰？」

???「俺か？俺はイルミナ・アレイズ気軽にアレンとも呼べばいい。そしてこの腕輪みたいなのが俺の相棒のヴィゾーヴニルだ。」

(Nice to meet you.)

アリサ「な・・・ないすとうーみーとうー。それでここは？」

イルミナ「おっと、君の名前をまだ聞いてないぞ。」

アリサ「す・・・すみません。あたしの名前はアリサ・・・アリサ・

バニングス。」

イルミナ「おや・・・ここでは変わった名前だな。ニホンジンじゃないのか？」

アリサ「いえ・・・あたしはたまたま日本生まれだけです。一応日本人・・・なのかな？・・・それよりここは？」

イルミナ「そうだったな。ここは俺ら二人の隠れ家だ。あまりつらい思いをさせたくないが・・・昨日のことは覚えているかい？」

アリサ「うつ・・・はい。」

イルミナ「それより・・・すごい汗だな。悪い夢でも見たか？風呂に入って汗を流してくると良い。こんなこともあろうかと沸かしておいて正解だったな。それと服は洗濯機に入れておくといい。代わりの服は・・・これしかないが我慢してくれ。」

と言ってあたしにバスローブを手渡してきた。

アリサ「これ・・・服じゃないし・・・。」

イルミナ「すまないな。サイズが分からなかったからこんなものしか無いんだ。」

アリサ「ま・・・いいわよ。じゃあお風呂借りるね。アレン。」

イルミナ「ああ。洗濯機に服を入れたら回しておいてくれないか？」

アリサ「わかった。それじゃ入って来るね。」

あたしは服を脱ぎ、洗濯機に入れ、洗剤と柔軟剤を入れてボタンを押す。そしてあたしは風呂に入って汗を流すことにした。

〈約20分後〉

洗濯機の駆動音が止まり、脱衣所のドアからコンコンと音がしてアレンが声を掛けてきた。

イルミナ「洗濯機が止まったから、脱衣所に入っても良いかい？乾燥機に入りたいんで……。」

アリサ「いいわよ。」

イルミナ「じゃあ入るぞ。」

ガチャと音がしてアレンが脱衣所に入る。そして洗濯機の蓋を開ける音の後にガサゴソ……ボタンと音がして乾燥機が回りだす。そしてアレンが部屋から出て行った。

〈約10分後〉

あたしは風呂を出て体を拭く。乾燥機はまだ回っていたので、アレンから先ほど手渡されたバスローブを身に着けて脱衣所を出てさっきのベッドのあった部屋に向かった。部屋に入るとアレンがコー

ヒーを飲みながら新聞に目を走らせていた。

イルミナ「出てきたか・・・長いな。」

アリサ「女の子なんだから仕方ないでしょ！それでも頑張って・・・  
少しだけ急いだのよ。！」

イルミナ「は・・・はあ。それより何か飲むかい？コーヒーか紅茶  
があるけど。」

アリサ「んじゃ紅茶で。」

イルミナ「はいはい、それじゃ今から用意するから少し待っていて  
くれよ。」

アリサ「うん。」

そして、アレンは腰掛けていた二人掛けのソファから身を起こし  
て、新聞をテーブルの上に置いた。新聞が気になったので少し覗い  
てみることにしたが・・・。

アリサ（はあ！？何これ・・・何て書いてあんの？全く読めない。  
英語でもフランス語でもスペイン語でもない。こんな字初めて見た。  
）

と、アレンが紅茶を淹れたポットとティーカップを持って来た。

イルミナ「その新聞を読めるのかい？」

アリサ「いや・・・全く読めない。」

イルミナ「そりゃそうだろう。それはミッドチルダで使われている言語だからな。読めたら逆に驚くよ。・・・はい、紅茶。」

アリサ「あ・・・ありがと。アレンは読めるの？」

イルミナ「もちろん。なにせ俺はミッドチルダ出身だからな。というか読めなかったら普通新聞とらないだろ。」

アリサ「う・・・それは置いて。ミッドチルダってもつと技術が発達したとこだと思ってたけど・・・そうでもないのかなあ？」

イルミナ「はっはっはっ、これは個人的な趣味みたいなものだ。俺はあまり電子機器とかになれなくてな。それにこっちの方が読みやすいしな。」

アリサ「へえ、・・・ねえねえ、あたしにミッドチルダ語教えてよ。」

イルミナ「？・・・学校の勉強とかいいのか？責任とれないぞ？」

アリサ「いいのよ。あたし学年トップだし、最近勉強つまなくて・・・だから教えてよ。」

イルミナ「分かったよ、教えるよ。」



時間が過ぎるのは早く、気付けば夕方だった。

イルミナ「むっ・・・今日はここまでだ。他にやることがある。」

アリサ「????」

突然、アレンの顔つきが真剣なものになった。

イルミナ「真面目な質問だ。正直に答えてくれよ。君は・・・力が欲しいか？」

アリサ「ちか・・・ら？」

イルミナ「そうだ、力だ。愛する者や友を守るための力だ。」

アリサ「でも・・・すずかは・・・。」

そうだ。すずかは殺されてしまった。親友と呼べる存在に・・・。

イルミナ「大丈夫だ、彼女は生きている。実はあの時彼女にはまだ息があった。助けられなかったのは残念だが、どうやら管理局に連れて行かれたようだ。」

アリサ「さすがが・・・生きている!？」

イルミナ「ああ、彼女を助けたくないか？そのための力が欲しくな  
いか？」

アリサ「ほしい・・・力が欲しい・・・さすがを守るための力が・  
・欲しいっ!・・・でもあたしには魔法が使えない。」

イルミナ「大丈夫だ。君には力がある。魔法を使う力が君には眠っ  
ている。その封印を解きに行こう。さあ着替えて。」

あたしが着替え終わると、アレンはあたしの手を引いて隠れ家を  
出た。

## 第8話「決意」(後書き)

かなかな、アリサのバリアジャケットが思いつきません。次話まで少し時間がかかる可能性があるので、そこんとこよろしく願います。

## 第9話「炎の契約」（前書き）

前話から一週間後の投稿となっていました。これから3〜5日のペースで投稿したいと思います。

## 第9話「炎の契約」

時間は戻る

《アリサ side》

あたしがアラストールに触れた。

アラストール「これで契約が済んだ。契約料として魔力を貰い請けるぞ。」

トクン・・・トクン・・・トクン・・・

あたしのリンカーコアから聞こえてくる鼓動が早くなる。それと同時に、リンカーコアから円と三角形の魔法陣が現れる。それは幾重にも重り、もはや球状になって見える。

ピキ・・・パキン・・・パキパキ

ガラスに罅がはいるように、魔法陣一つ一つに亀裂が走る。

パキパキ・・・ガシャン！

ガラスが砕け散る音と共に魔法陣が崩れ落ち、大量の魔力が溢れリンカーコアに炎が灯る。そして、その炎がアラストールに取り入れられる。

アラストール「契約料としてかなりの魔力を貰い受けたが、まだ半分以上残すとはな・・・先代では魔力が足りず自滅してしまうケースがあつたが、こんなに魔力を残したのは初めてだ。」

アリサ「ちよつと疲れちゃったけど、まだまだ動けるわ。肩慣らしに何かしたいんだけど。」

アラストール「ふむ・・・そのまえに我を君の首に掛けてくれんか？」

アリサ「そうだったわね。・・・よいしょ。それで？」

アラストール「うむ。それではまずバリアジャケットを決めてもらいたい。デザインを頭の中に浮かべれば、それで良い。」

アリサ「バリアジャケットね・・・まあこんな感じがしら。」

アラストール「承知した。」

あたしの体を炎が包み、服が消える。そして炎がバリアジャケットへと変わっていく。そのデザインはチャイナ服を思わせるような赤い縁取りが施してある袖の無いワンピース。その上に膝下までの

長さがある黒のロングコートを袖を通さずに羽織っている。そしてアリサの背中からは炎の翼が生えており、その中に等間隔で真っ赤な菱形の宝石が五つずつの計10本が翼の羽を形作るように炎の中に浮かんでいる。さらに髪からは火の粉がばらりと舞い散っている。

アリサ「ちょっと！この黒のロングコートはイメージしてないんだけど！？」

アラストール「仕様だ。そこには何でも収容できる。」

アリサ「ふうん、ドラ もんの四次元ポケットみたいなもんか……」

と、いいながら『贄殿遮那』を出し入れしてみる。バリアジャケットの感触を確かめていると、前方からクロノの声が聞こえてくる。

クロノ「なのは！しっかりしろ！起きろ！フェイト！はやて！……ヴォルケンリッターもか……くそ！通信が途絶えてるし念話も使えない……。」

アリサ（あいつ……。）

アリサ「アラストール、肩慣らししたいんだけど。高速移動魔法の使い方教えてくれない？」

アラストール「うむ。……これでどうだ？」

頭の中に直接情報が流れ込んでくる。魔法の名称、概要、用途が次々に頭に入っていく。

アリサ「高速移動魔法は『フレイムフリーユージェル』……よし、分かった。それじゃあ早速フレイムフリーユージェル！」

あたしの体があつた場所に火の粉だけ残し、クロノの後ろに移動する。

クロノ「はっ！……あ……アリサ、こんな馬鹿なことはやめてくれ。」

クロノはあたしに気付き、振り向きそう言った。

アリサ「馬鹿なこと？……なにそれ。それってあんた達のことじゃないの？」

クロノ「君は何を言って」

アリサ「うるさい。……すずかの受けた痛み、あんた達にも受けさせてあげるっ！」



あたしは『贄殿遮那』をクロノに向かって振り抜く。クロノはすぐさまそれに反応し、デュランダルで『贄殿遮那』を受け止めた。

クロノ「くっ……。確かに僕達はすずかを守れなかった。だが、すずかを傷つけたのは」

イルミナ「無駄話はそこまでだ。スナイプショット！」

アレンの援護射撃でクロノが一旦あたしから離れる。

アリサ「アレン！今魔法はあまり使わない方が……。」

イルミナ「分かっているさ！早くケリをつけてくれよ！」

アリサ「分かった！……アラストール、攻撃魔法を片っ端からあたしの頭に流して！」

アラストール「承知した。」

クロノ「すずかを傷つけたのはその男だ！アリサ今すぐ戦闘行為をやめろ！」

と、言いつつクロノがアレンに指を指す。

アリサ「そんな分かりきった嘘を誰が信じるの？あたしは見たの、

あんたがずずかを氷の槍で突き刺すのを！」

クロノ「は！？そんなことは」

アリサ「うるさいうるさいうるさい。あんたなんか消えちゃえばいいのよ！フレイムファンゲ！」

あたしの声と共に、炎の翼から8つの菱形の宝石が飛び出し、クロノの方へ向かって飛んでいく。

クロノ「な・・・なんだこれは！？」

菱形の宝石 フレイムファンゲ は先端に魔力刃を展開し、クロノに襲い掛かる。すると・・・

バシユッ

クロノ「！？・・・砲撃だと！？でも、一体どこから・・・まさか、あの宝石か！？」

アリサ「よく気付いたわね。でも、それが分かったとしても逃げられない。そこっ！」

クロノ「！？・・・しっ、しまった！」

クロノが複数の紅の魔力砲の熱戦に取り囲まれ、身動きが取れなくなる。あたしはその隙を突き、『贅殿遮那』をクロノに向かって突き立て前に飛ぶ。

アリサ「はあああああああああ！」

グサリ・・・ボタボタッ

炎を纏った刃がクロノの下腹部を刺し貫く。その刃を伝って赤色の生温かい液体がボタボタと地面に落ちる。

クロノ「がはっ！あ・・・アリサ・・・。」

アリサ「・・・消えろ。」

あたしはクロノの胸の前に手を翳す。

アリサ「・・・フレイムリヒト。」

翳した手から、紅の光線が瞬く。クロノの体は光に飲み込まれ、ビルの壁に光線と共に衝突し、砂煙が立ち込める。煙が晴れると、そこにはうつ伏せに倒れて動かなくなったクロノの姿がある。

アリサ「呆氣ないわね。まあ、さっきのアレンの魔法で99%近い魔力が吸収されちゃったから仕方が無いとは思っけど。一応、非殺傷設定だったけど大丈夫よね、死んでないわよね？」

本当の目的はすずかと同じ痛みを受けさせることだ。殺すことではない。そう結論に至っての対処だ。

アリサ（まあ、死んでても死んでなくてもどっちでもいいけどね。・でも、あたしはすずかを守るためだけなら何でもする。そう心に誓ったから・・・誓ったからこの力を手にした・・・。）

心の中で、自分の決意を再確認する。それに揺るぎが無いことを確認して辺りを見回す。

アリサ「次はどいつにしようかしら。」

地面に倒れ伏している元親友を見回す。そこでアレンから声がかかった。

イルミナ「アリサ、そろそろ結界が持ちそうに無い。この結界の外側は管理局の結界がある。転移先を探知されても厄介だ。引き上げるぞ。」

アリサ「・・・分かった。」

少し不満げにそう答えた。そしてアレンと一緒に、あたしの転移魔法で隠れ家に転移した。

## 第9話「炎の契約」(後書き)

作者「駄文ブンｗｗｗ」

アリサ「全然面白くないわよ。」

作者「だろうな。とりあえずアリサ、俺と結婚してくれ。」

アリサ「死ね！」

作者「最高の褒め言葉だ！もっと言ってくれ！」

アリサ「・・・・・・・・」

作者「無関心つてのは一番酷いんだよ(泣)」

アリサ「次回もお楽しみに！」

作者「こらっっ！勝手におわ(ry

## 第10話「シュツツリッター」

### 《リンディ side》

魔導師部隊が派遣された直後にクロノ達との通信、念話が途絶えた。

リンディ「結界の解析を急いで！」

エイミィ「今やってます！でも、今までに無い結界で割り込める隙がありません！」

通信が途絶えてから10分以上は経過している。それなのに、未だに結界の解析が終わらない。嫌な予感がアースラの艦内に漂う。

エイミィ「！？・・・結界が解かれます！」

リンディ「嫌な予感がするわ。結界消滅後、すぐにみんなと連絡を取って！それと艦内への転送の準備も一応お願い！」

エイミィ「了解！・・・結界内の映像出ます！」

正面の巨大な画面に映像が映し出される。

リンディ「みんなとの通信は!？」

エイミィ「・・・駄目です。みんな応答しません。しかし、生体反応は検出されました。7人が固まっていて、もう1人が100mほど離れた場所です。それと魔導師部隊は既に収容が終わったとの連絡が入りました。」

リンディ「そう・・・みんなを映像に出せる?」

エイミィ「了解!・・・映像出ます!」

リンディ&エイミィ「はっ!？」

そこに映っていたのは、地面に倒れたなのは達だった。そして何より衝撃的だったのは、下腹部から血を流してビルの壁にもたれ掛かっているクロノの姿であった。

リンディ「クロ・・・ノ!？」

エイミィ「クロノ君!」

リンディ「早くっ!・・・早くみんなをアースラへ!医療班は待機を!」

そしてすぐさまクロノの元へ走っていった。



《アリサ side》

手にはまだ、クロノを刺した感触が残っている。その手を眺めながら握ったり開いたり、さつきからずっと繰り返している。それに心配そうにアレンが声を掛けてくる。

イルミナ「・・・後悔しているのか？・・・刺したことを。」

あたしはその質問に首を横に振った。

アリサ「ううん。あたしは・・・あたしはすずかのためなら何でもする。そう決めたから・・・後悔はしてない。」

イルミナ「・・・ホントにそうか？」

アリサ「例えそれが嘘だったとしても、もう後戻りはできない。だから後悔はしてない。」

イルミナ「お前、ちつこいのにすぎえ大人だよな。だが、確かにもう後戻りはできないな。俺もお前も・・・。」

ピピピッ

ここで何かの電子音が鳴った。するとアレンが腕のデバイスを操

作し始めた。

イルミナ「俺だ。．．．．．今終わったところだ。そちらの準備はどうなっている？．．．．．分かった、明日そちらに行く。．．．．．もちろんだ、アリサも連れて行く。人数は多いほうがいいだろ。．．．．．ああ、じゃあ切るぞ。」

そう言つて、またデバイスを操作する。多分誰かとの通信だろうが、一応訊いてみる。

アリサ「何してたの？」

イルミナ「仲間との通信だ。」

アリサ「なかま？」

イルミナ「ああ。俺は管理局の一部の人間の排除を目的とする組織『シュツツリッター』の構成員でありナンバー2だからな。」

アリサ「ナンバー2ってことは2番目に偉いつてこと？」

イルミナ「ああ、そうだ。そして俺の任務は、君の保護と違法な封印の解除といったところだ。」

あたしに掛けられていた封印魔法は、どうやら違法なものだったらしい。確かに、本人に同意も得ずそんなことをするのは違法に決

まっている。しかし、あたしには次元世界間の法律などはよく分らないので、話の方向を変えることにした。

アリサ「へえ、じゃあさっきの通信の内容は？」

イルミナ「俺の任務が成功したことの報告と、次の作戦の準備ができたかどうかの確認だ。」

アリサ「ふん。ねえ、そういえばさっきから気になってたんだけど、まさかあたしもその『シュツリッター』に入ってるの？なんかさっき連れて行くと言ってたけど・・・」

一番の疑問点を単刀直入に訊いてみた。

イルミナ「一応建前上はメンバーに入っている。君が同意さえすれば、正式なメンバーになる。」

アリサ「もし、嫌だっけいったら？」

イルミナ「強引にでも入らせるさ。君をこのままにしておく訳にはいけないからな。」

管理局を敵に回すものすごく面倒くさそうだ。だが、本当に断ったら、より面倒くさそうな状況になると思い、適当に返事をしておいた。

アリサ「じゃあ、入るわ。」

イルミナ「決まりだな。今からアリサ・バニングスは正式に『シュツリッター』のナンバー3になった。おめでとう。」

アレンは、嬉しそうに握手を求めてきた。

アリサ「どういたしまして。あたし今日たくさん汗かいたからお風呂に入ってくる。」

それに対し、あたしは棒読みの返事をしてどうでもよさそうに脱衣所へ向かった。

### 《イルミナside》

アリサが脱衣所に向かっていった。特にすることも無いのでソファに座ることにした。

イルミナ「はぁ・・・、テンション下がるわ、あんなリアクションされたら・・・にしても、今日は疲れた。」

気付けば、自分の意識は眠りに落ちていた・・・。

## 第10話「シュツツリッター」（後書き）

昨日投稿しようと思っていたら眠っていてしまった。申し訳ない。

今回はイルミナの過去についてのお話にしたいと思っています。

## 第11話「過去」

《???? side》

今、僕はとある執務官室へ向かっている。テロ組織対策本部の本部長のシルヴァ・ロムウエム大佐にクレームを言いに行くためだ。

コンコン

????「失礼します。」

シルヴァ「む？誰だ……なんだイルミナ、また君か……。」

大佐はため息をつき、いかにも嫌そうな顔をしている。

イルミナ「またとは何ですか、またとは！？……それより、来週決行されるあの作戦、何なんですかアレは！？」

シルヴァ「うるさいなあ、少しは落ち着けて……。」

イルミナ「これが落ち着いていられますか！？この作戦おかしくないますか！？相手はもしかしたら法律で禁止されている質量兵器を所有しているかもしれないですよ！？」

僕が言っている作戦というのは、最近動きが活発化した反管理局のテロ組織の一斉摘発のことだ。どうやらこの近辺にアジトを隠しているらしい。

シルヴァ「と言われても、この作戦内容を考案したのは俺じゃなくて評議会の人間なんだよ。」

イルミナ「そこを何とかするのがあなたの仕事じゃないんですか！？万が一失敗でもしたら、多くの民間人や管理局員が犠牲になるんですよ!？」

シルヴァ「ハア・・・最近のちびっ子はどうしてこんなのか？なんだあ？ハラオウンの息子さんもアレだしなあ・・・。」

イルミナ「ちょっと!？聞いてるんですか!？」

シルヴァ「聞いてるよ。」

イルミナ「じゃあ、少しは」

言いかけたところを大佐の言葉によって遮られる。

シルヴァ「努力したさ。57回・・・俺が作戦変更の案を評議会に提出した回数だ。だが、その案は通ることは無かった。なぜなら、書類に目も通さずに書類を処分しているからだ。」

イルミナ「そんな・・・。それなら三提督や別の評議会委員にその



ことを告発すれば」

シルヴァ「三提督に書類は行かない、その前に処分されるからだ・  
・何度も試した。それに、別の評議会委員に告発文を提出した。だ  
が、これも消された。」

イルミナ「そ・・・そんな。」

シルヴァ「ヤツら全員グルなんだ！この作戦も俺らみたいな邪魔者  
を管理局から消すためだ！対策副部長の中佐だって、だいぶ前から  
評議会に目をつけられている！」

イルミナ「それなら、こちらで作戦変更を・・・。」

シルヴァ「それでは、命令違反で査問にかけられ全員のクビが飛ぶ  
中止も同じだ・・・テロ組織は質量兵器を所有している。これはつ  
い最近の調査で分かったことだ。俺達は死ぬか、クビかの二択しか  
ないんだ。」

言葉も出なかった。まさにその文字通りだ。ただ立ち尽くすしか  
なかった。

それからどうすることも出来ず、ついに一週間が経ってしまった。  
作戦当日だ。僕達はテロ組織が使用していると思われる建物の周り  
で待機していた。大佐の命令待ちだ。

大佐から全員に通信が入った。

シルヴァ「会議で話した通り、相手は質量兵器を所有している。私

が合図すると同時に砲撃部隊は南側の壁を砲撃。その後、我々突撃部隊は北側から突入する。一人でも逃がすなよ！絶対にだ！そしてみんな生きて帰ろう。」

シルヴァ大佐はテロ組織のアジトの中の様子を窺っている。しばらくしてから、大佐が合図を出した。

シルヴァ「突撃・・・開始！」

ドゴオン！

と、派手な爆発音と共に建物の南側の壁が崩れる。そして、一斉に局員が雪崩れ込みテロ組織のメンバーを捕らえていく。

局員A「大人しく降参するんだな。」

局員B「よし、こっちも捕まえたぞ！」

局員C「大佐！ここに質量兵器があります！」

シルヴァ「よくやった。これで全員捕まえたな。」

イルミナ「犠牲も出なかったし、大成功ですね。」

ちなみに僕は、魔力変換資質の氷結で10人ほどの足と腕を拘束

した。

シルヴァ「にしては、えらく呆気無かったな。不気味なくらいだ。」

イルミナ「いいじゃないですか、とりあえず成功したんだし。」

シルヴァ「うん。何か嫌な予感がする。」

大佐がそう言った瞬間、局員が驚愕の声を上げた。

局員C「た・・・大佐！急にこの兵器が稼動しました！」

シルヴァ「な・・・何！？どこを触った!？」

局員C「誰も触れてはいません。ただ、突然に電源が入りカウントダウンが・・・。」

シルヴァ「おい貴様ら！これはどうなってんだよ!？」

大佐は叫びながら、テロリストの襟に掴みかかった。

## 第11話「過去」(後書き)

1話分で終わらせるつもりだったんだけど・・・ま、いつか。

## 第12話「夢」

テロリスト「へへっ、俺らのアジトはここだけじゃねえ。こっから10km以上離れたところに支部があんだよ。」

シルヴァ「な・・・なんだと!？」

テロリスト「そして、この本部に異常があると、支部の独断で本部から半径3kmの範囲を焼け野原にする爆弾が起動するようになる。」

テロリストの男は、起動した爆弾を眺めながらそんなことを言っただ。ここから半径3kmといえば、僕の家族の家があるところだ。今の時間帯ではちょうど父と妹が家に帰っているころだ。僕はそのまま床に崩れ落ちた。

シルヴァ「仲間を殺すのか!？その支部のヤツらは!？」

テロリスト「俺らは元から覚悟してここにいる。」

シルヴァ大佐と男が話す声が僅かに聞こえてくる。

そして周りのテロリスト達は目を伏せ俯き抵抗をびたりと止めた。まるで死を覚悟した死刑囚のように。

シルヴァ「なんてふざけたことをするんだ。君達は。俺は殺さない

ぞ、君達と局員と一般人を絶対を守る！」

テロリスト「お前みたいなヤツが管理局のトップなら、俺らもこんなことせずに済んだのになあ。そうだ、いいことを教えてやろう。」

男はまた不敵に笑って言葉を続けた。

テロリスト「管理局の高官達は、このアジト以外のアジトの場所を掴んでいる。お前達がそれ知らないってことは、そいつらに必要なえって思われたんだな。そしてこのまま半径3kmが焼け野原になっても、管理局の高官共は俺らに支部があつたなんて知りませんでした、で済ます気のようなぜ？」

シルヴァ「そんなことはさせない。今すぐここを脱出するぞ！」

テロリスト「無理だな。ここから少しでも離れれば爆弾は爆発しまうし、もう時間のようだぜ……。あばよ、全ての次元世界に真の平和を切に願う……」

そして目の前が光に包まれた。最後に見たのは物凄い形相で僕の方へ走ってきた大佐だった。

・  
・  
・  
・  
・

気が付くと背中全身が火傷だらけの大佐が横たわっていた。辺り

を見回してみると殆ど何も無い。平らな地面が延々と続いている。

イルミナ「た・・・大佐、僕を庇って・・・こんな・・・。」

シルヴァ「は・・・は、今までで最高の強度を誇るシールドを展開したのにこの様かよ・・・ぐっ。」

イルミナ「どうして、僕を庇って・・・。」

シルヴァ「んなことは決まってるじゃねえか。お前にはまだ未来がある。こんなシケたおっさんなんかよりもずっと価値がある存在だ。その時間を大切に使って、管理局を正しい方向へ・・・ゴホッゴホッ」

イルミナ「もう喋らないで下さい。傷が余計に広がります。今治療魔法を・・・。」

シルヴァ「もうもたねえ。視界がか・・・すんで・・・きて、もう長くはない。未来は・・・お前に託した。」

そして大佐の体がゆっくりと弛緩した。

イルミナ「た・・・大佐あああああああああ！！！」

大声で泣き叫んだ。一番頼りにしていた大佐がここで命を散らしてしまった。

それから、しばらくして今自分の家があった場所で復讐を誓った。すると、後ろから足音が聞こえてきた。

イルミナ「だ・・・誰だ、お前は？」

男「俺は、お前と同じ志を持つ者だ。一緒に来るか？」

少し考えた。だが答えは既に決まっている。もちろん。

イルミナ「行く。」

目が覚めた。目の前ではアリサが心配そうに顔を覗き込んでいる。

イルミナ（夢か。にしても悪い夢だった。）

アリサ「すごい魔されてたけど大丈夫？悪い夢でも見た？」

イルミナ「ああ、悪い夢だった。うわ、すごい寝汗だ。」

アリサ「お風呂にでも入ってくれば？」

イルミナ「そうさせていただくよ。」



そして明日のことを考えながら風呂に向かった。

## 第12話「夢」（後書き）

なかなか、書くのが進まない  
一週間に一回は更新したいよう

### 第13話「安否」

#### 《エイミィ side》

あれからすぐに、本局へ向かい今は全員医務室に運ばれた後だった。

リンディ「……私も一緒に行っていれば、みんなをこんな事には……。」

エイミィ「だ……大丈夫だよ。きっとみんなすぐに目を覚ますよ……。」

うな垂れているリンディ提督を私が必死に慰める。こついつたやり取りを何回もしている内に医務室のドアが開き中から白衣を着た医者と看護師が出てきた。

リンディ「み……みんなは大丈夫なの！？クロノは！？」

こんなにも取り乱した提督を見るのは初めてだ、と驚きながらも医者の言葉に耳を傾けた。

医者「クロノ執務官以外は、魔力の枯渇による一時的な疲労で、一

晩眠れば全員明日には回復し仕事に戻れるでしょう。クロノ執務官は魔力の枯渇に合わせ、その枯渇状態での限界を超えすぎた魔力ダメージにより当分目は覚めないでしょう。腹部の刺し傷はそれほど酷くなくこのまま治癒魔法を掛け続ければ2、3日で傷は無くなるでしょう。」

リンディ「クロノは何時目が覚めるんですか？」

医者「それは私にも分からない。こんな患者は初めてだからなあ。魔導師ランクSSでも不可能なはずなんだが・・・化け物とでも戦っていたのか君達は？」

医者は呆れた様子で私達に尋ねる。

エイミイ「いいえ、実は第97管理外世界で事件が起こりまして・・・それで・・・。」

医者「はぁ・・・またそこか、最近そこで大きな事件が多発しているな。PT事件といい闇の書事件といい、次はいつたい何事件だ？おっ・・・そう言えば、第97管理外世界で思い出した。あの～なんて言ったっけ？」

リンディ「月村すずかの事でしょうか？」

医者「そうそう、その月村すずかなんだが、最近目を覚ましたんだ。まだ歩けるまでには回復していないが、1、2週すれば退院できるそうだ。さっき病院から連絡が入ってな、そう伝えてくれと言われた。」

リンディ「それはよかった。今度みんなでお見舞いに行かなくちゃね。クロノも早く目を覚ましてくれればいいんだけど……。それに、アリサちゃんも……。」

医者「それでは私はこれで失礼するよ。今日は魔力枯渇患者が多くて、書類やら何やらで忙しいんだ。」

リンディ＆エイミー「ありがとうございました。」

お礼を言つと、医者はそそくさと去って行った。

エイミー「みんな命に別状がなくて良かったね。」

リンディ「ええ、よかった……。本当に。」

《アリサside》

白いベッド上で目が覚めた。朝日が覚めたばかりの目を焼く。

コンコン、ガチャ

ドアが開き、アレンが部屋に入って来た。

イルミナ「おはようございます。アリサさん。」

アリサ「うん、おはよアレ。今日は・・・。」

イルミナ「ええ、昨日話した通りに、その前に朝食を摂りましょう。」

アリサ「なんか口調おかしくない？」

イルミナ「え・・・そんなにおかしかったか？」

アリサ「うん、なんか執事みたかった。正直気持ち悪いわ。」

イルミナ「しょぼ～ん。ま、朝飯食べようぜ！」

そう言われ、半ば強引に食卓へ連れられて来た。テーブルの上には目玉焼きなどといった日本の朝食でよく見られるものがずらりと並んでいた。

アリサ「うわぁ・・・これ全部アレが作ったの？」

イルミナ「まあな、ニホンの料理本を見て勉強したんだ。この俺にワシヨクで作れないものは無い！」

アリサ「へえ・・・どれ、モグモグ」

イルミナ「どうだ？」

アリサ「う・・・美味しい、美味すぎるわ。こんなの食べるの初めて、この出汁巻き卵なんて絶品ね！」

イルミナ「そりやどうも。」

どんどん箸が進む。気付けば皿の上が全て綺麗になっていた。

アリサ「はあ、美味しかった。」

イルミナ「ああ、我ながら感激するほどの腕前だ。」

アリサ「ねえねえ、こんどは中華とかフランスとかイタリアの料理も作ってよ！」

イルミナ「うゝむ、チュウカにフランス、イタリアかあ。頑張って勉強するよ。」

アリサ「ありがとつ。」

朝食を食べた後、顔を洗ったり、歯を磨いたり、髪を梳いたりといろいろ、出発の準備を整える。

一通り準備が終わると、アレンが声を掛けてきた。

イルミナ「準備は整ったか？」

アリサ「うん。」

イルミナ「なら行くか。起きろヴィゾーヴニル、仕事だ。」

(Yes, My Master.)

イルミナ「超距離転送！」

(Redirect!)

足元に半径1mくらいの群青色の魔法陣が展開される。そして光と共に体がある場から消えた。



### 第13話「安否」(後書き)

次の投稿は3月になりそうだなあ

## 第14話「overss」(前書き)

久しぶりの投稿になります。相変わらずの駄文ですが、温かい目で見てください。

## 第14話「overSSS」

アリサside》

転送先は深い森の中だった。足元は、膝の高さまである、見たことも無い草が生い茂っていた。

アリサ「アレン、ここはどこ？」

イルミナ「ここか？ここは、第48管理世界だ。管理世界といっても、魔導生物ぐらしいしか住んでいない。」

アリサ「ふん。じゃあこんなところに何しに来たのよ、あたし達は？」

イルミナ「まあまあ、慌てるな。そろそろ来る時間だ。」

アレンがそう言ったとき、目の前に赤色の魔法陣が展開された。そしてそこから人が出てきた。年齢は大体20〜30歳くらいで、身長は190cmくらいはある男だった。

???「既に到着していたようだな、ナンバー2。待たせてしまったか？」

イルミナ「いや、今さっき着いたところだ。ナンバー1。というよ

り、その呼び方はやめないか？ギルバート・デモン・アークライト。」

ギル「すまないな、イルミナ。ほう、このお嬢さんがあの……。なかなか、かわいいじゃないか。」

イルミナ「やめてくださいよ。彼女怖がってますよ。それより、今日の作戦は？」

ギル「事前に伝えたことに変更は無しだ。頑張ってくれよ。じゃあな。」

イルミナ「ああ、分かっているさ。じゃあな。」

ギルバートと呼ばれた男は、赤い魔法陣を足元に展開させ、どこかに飛んでいってしまった。

アリサ「それで、結局作戦ってなんなのよ？」

イルミナ「今日の作戦は、この先にある研究所兼特別収監所の破壊と、そこに収監されている一人を救出することだ。」

アリサ「ちょっと待って。さっき普通に魔法使ってたけど、大丈夫なの？」

イルミナ「なに、問題ないさ。ここら辺にはジャミング装置がばら撒いてある。転送魔法程度じゃあ相手のリーダーには引っかけられないさ。」

アリサ「研究所で働いてる人たちは？もしかして殺せっていうの？」

イルミナ「その必要は無い。魔力ダメージでのノックダウン程度で十分だ。」

アレンはそう言うのと、ポケットから一枚の写真を取り出してあたしに見るようにと促してきた。

イルミナ「この子を救出することが第一目標だ。」

アリサ「へえ、年齢はだいたいあたしと同じくらいね。この子を檻から救出すればいいのね。あと、第一目標があるってことは、第二もあるってこと？」

イルミナ「察しがいいな。その通りだ、第二目標は研究施設の破壊だ。間違っても人は殺すなよ。」

アリサ「わかったわ。それじゃあ行きましょ。」

イルミナ「ああ、そうだな。起きろヴィゾーヴニル仕事だ。」

(Yes, Sir!)

アリサ「行くわよ。アラストールっ！」

アラストール「承知した。」

二人は己のバリアジャケットを纏い、研究所へと向かった。

### 《リンデイスイデ》

全員の命に別状が無いことがわかってから10時間は経った。その間、リンデイとエイミイはずっとクロノ達が寝ている集中治療室の前で一睡もせずに座り込んでいた。

10時間の間に割と軽症で済んだ、なのは、フェイト、ユーノが意識を取り戻し、今は別の病室で寝かせられている。

エイミイ「そろそろアースラに戻りましょ？少しは寝ないと、身体に障ります。そんなに若くないんですから。」

リンデイ「ええ・・・そうね。でもみんなが心配で・・・とても寝られそうに無いわ。」

ハアと、ため息をついたとき、管理局内部でアラートが鳴り響いた。

リンデイ&エイミイ「一体、何！<sup>なの</sup>？」

局内放送「第48管理世界で所属不明の魔力反応！提督階級は直ちに司令部へ！繰り返し、第48管理世界で所属不明の魔力反応！提督は直ちに司令部へ！」

エイミィ「今の聞きました!？」

リンディ「ええ、すぐに行きましょう!」

司令部に到着すると、リチャード少将が迎えてくれた。司令部には地上本部のトップの人間も来ているようだった。

リンディ「どうしたんです!? 一体何が!？」

リチャード「まあ、落ち着きたまえ。今は現状の把握が大切だ。」

少将に落ち着くように促され、深呼吸する。すると、管制官が叫び声をあげた。

管制官「魔力反応を2つ確認しました! 一つはA Aクラス、もう一つは測定不能です!」

リチャード「測定不能? 反応が小さ過ぎるのか!？」

管制官「いえ・・・分かりませんが、もう少し待ってください・・・でした!」

リチャード「どうなんだ?」

管制官「・・・・・・おい・・・・嘘だろ!？」

リチャード「どうしたんだ？」

管制官「いえ・・・何でも、もう一度やってみます。・・・  
・ば・・・馬鹿な！こんなのあり得ない！」

リチャード「どうしたと言っんだ！？」

管制官「魔力量が大きすぎて、測定できません。」

管制官「ランクオーバーSSSクラスです。」

絶望に満ちた声が司令部に響き渡った。



## 第14話「overss」（後書き）

ここからはいつも通りのマイペースで投稿していきたいと思います。  
作者には、読んでくれる方のお分かりの通りネーミングセンスが皆  
無です。許してください。

第15話「第48管理世界」(前書き)

いやー、今日の地震はすごかった。揺れに揺れた！  
テンションあがったわーwww。

## 第15話「第48管理世界」

### 《リンディside》

リンディ「オーバーSSSですって・・・!？」

リチャード「あ・・・ありえん。今までの記録ではSが最高だったはず・・・。それを軽く超える魔力量の魔導師を・・・。いや、まだ敵と決まった訳じゃない。管制官、その周辺の状況はどうなっている?」

管制官「膨大な熱量で覆われています。爆発か、何かでしょうか?ですが、第48管理世界には人間は住んでおらず、魔導生物くらいしか居ません。その魔導生物の希少価値も全く無く、探査地域周辺に火山も無いはずですよ。」

リチャード「むう、確かに・・・言われてみれば第48管理世界には建造物も無かったはず・・・と言うより、管理局の環境保護隊くらいしか入れないはずだが・・・。」

リンディ「とりあえず、近くの次元航行船にでも連絡を入れて調査しないと・・・。」

リチャード「いや、無理だな。あそこに入るには議会の認証がいる。そう易々とはいかないだろう。」

リンディ「何故認証がいるんです!?!あそこはただの自然保護区域ですよ、おかしいじゃない!?!」

リチャード「わ．．私に言われても困るのだが．．．」

リンディ「私、行つて来ます。行くわよ、エイミィ。」

エイミィ「は、はあ。」

リチャード「ま．．待ちたまえ！」

リチャード少将の言葉を無視して、リンディとエイミィは司令部から退出した。

リチャード「これは、面倒くさい事になりそうだ．．ハア。」

司令部にはリチャード少将のため息だけが響きわたった。

《アリサ side》

研究員 A「う．．うわああああ。こ．．殺さないでくれー！」

ズドン

研究員 A「うぐあ。」

研究員B「や・・・やめてくれ！俺達が一体何を」

ズシャ

研究員B「ぐっ・・・」

アリサ「・・・・・・・・」

イルミナ「どうかしたか、アリサ？」

アリサ「・・・・・・・・」

イルミナ「別に殺してる訳じゃないんだ。そう思い詰めることは無いさ。」

アリサ「・・・でも、傷つけちゃった。関係の無い人達を・・・」

イルミナ「そんな事無いさ。こいつ等はやられて当然の事をやってきているからな。・・・着いたぞ。」

アレンがそう言って、目の前を見据える。それに習って、アリサも前方を見たがそこにあるのはただの壁だった。

アリサ「何これ、ただの壁じゃない。檻なんてどこにも無いわよ。」

イルミナ「まあまあ、こいつをこつやって・・・と、開くぞ。」

ゴゴゴゴと、いかにもな音を立てて壁だと思っていた扉が左右に開いた。そしてその中には鉄格子がはりめぐらかされた部屋があった。そこには、アリサと同じくらいの身長の人影があった。

???「だ・・・誰？またボクを実験に使うの？もう実験は終わったって言ってたのに・・・。」

イルミナ「いや・・・、そういう訳じゃない。俺達は貴女を助けに来ただけだ。」

???「ボクを・・・助けに？」

イルミナ「ああ、君を助けに来た。」

???「あなた達は、誰なの？」

イルミナ「俺はイルミナ・アレイズ。気軽にアレンとでも呼んでくれ。で、こいつが俺の相棒のヴィゾーヴニルだ。」

(Nice to meet you.)

???「こちらこそはじめまして、貴女は？」

アリサ「あたしはアリサ・バニングス、よろしく。んでこつちが」

アラストール「うむ、アラストールだ。よろしく頼むぞ。」

???「うん、よろしく。」

そこで、アレンが訝しげに女の子に話しかける。

イルミナ「俺等を信用するのか？何をするか分からないし、お前を殺すかもしれないのに。」

その言葉を聞き、女の子はううんと、首を横に振って答えた。

女の子「あなた達から邪な思惑は感じられないし、それにボクを殺すつもりなら有無を言わずに既に殺してるはずです。」

イルミナ「そうだな。……君、名前は？」

女の子「あつ、忘れていましたね。ボクの名前はシーナ・クジヨウよろしくね。」

イルミナ「ああ、それでだシーナ、俺達の仲間にならないか？」

シーナ「なかま？」

イルミナ「ああ、一緒に管理局の闇を倒すために。シーナをこんな目に遭わせたやつらを倒すために、協力してくれるか？」

シーナ「うーん、……分かったよ。ボクもボクをこんな目に

遭わせたヤツを許せないし。」

イルミナ「決まったな、これで君はシュツツリッターのナンバー4だ。」

アリサは黙ってその一部始終を見ていた。心の中にほんの少しだけ迷いを持ちながら。

# 《side out》

アリサ達が研究所兼特別収監所から引き上げた後、ミッドチルダ内である声明が発表された。

ギル『はじめまして、いや久しぶりになるのかな管理局とミッドチルダの諸君。我々はシュツツリッターである。そして私はそのリーダー、ギルバート・デモン・アークライトだ。我々は管理局の一部の人間が行った悪事の被害者である。そこで我々はその愚かな人間共に制裁を与えようと思う。だが、安心したまえこの件に無関係な者の命を取ったりはしないし、一般人に危害を加えるつもりは無い。あくまで管理局内で悪事を働く愚かな人間に制裁を与える。ミッドチルダの市民には管理局はそんなことをする筈が無いと思う者もいると思うが、これを見たまえ。ここは第48管理世界だ。書類上ここには人工の建造物は無く環境保護地域に指定されているがどういふことが研究所が建てられているではないか。それに、ここは管理局の管轄下であり違法な実験が繰り返されたというデータが残っている。我々はこの腐った部分の管理局を倒すため立ち上がった。』



た！全ての次元世界に真の平和を！  
』

第15話「第48管理世界」(後書き)

やつベアリス全然喋ってないし、なのはとかフェイトとか空気じやん。やべえじやん。じゃんじゃんじゃん。

新キャラクター追加です。ボクっ娘ってすばらしいよね。

## 第16話「星黎殿」

リンディ side》

アースラに乗艦し、艦橋に入ったところで、映像が流れてきた。

ギル『はじめまして、いや久しぶりになるのかな管理局とミッドチルダの諸君。我々はシュツツリッターである。そして私はそのリーダー、ギルバート・デモン・アークライトだ。我々は管理局の  
真の平和を！』

それを見ていた一同は言葉を失い、ただただ突っ立っていた。その静寂を破ったのはリンディだった。

リンディ「シュツツリッター・・・ですって!？」

少し間を置いてエイミイが訊ねた。

エイミイ「なにか知っているんですか？」

リンディ「ええ、今から3年前、新暦63年に起こった、ミッド郊外の大規模テロは覚えてる？」

エイミー「はい、確か多くの一般人と管理局員が犠牲になったあの事件ですか？でも、テロリストのリーダーは既に捕まっていて、組織も崩壊、その後管理局総出で残りのテロリストも全員捕まえたんですよね？テロリスト全員は終身刑だったはずでしたけど……。」

リンディ「そのことなんだけど、そのテロ組織がどうやら裏でシュツリッターと繋がっていたらしいのよ。管理局も完全な証拠を見つけられず、結局野放しになっていたんだけどね。まさか今現れるなんて……。」

そこで管制官が通信が来ていると言うのでつないでもらった。

リチャード『今を見たかね！？シュツリッターが我々管理局に宣戦布告してきおった！』

リンディ「ま……まあまあ、落ち着いて」

リチャード『これのどこが落ち着いてられるか！？上層部にもさっきの事が本当かどうかも問いたさねばならん！今すぐ司令部に来てくれ！』

一方的に通信してきて、一方的に切られてしまった。

リンディ「ハア……。しょうがないわね。もう一度司令部に行きましょう。」

そう言って、もう一度司令部に向かった。

《なのはside》

目を覚ますと目の前は白い壁だった。正確に言つと壁ではなく天井だ。

なのは「ここは？」

周りを見回すとそこにはフェイトちゃんとユーノ君が眠っているのが見えた。

なのは「フェイトちゃん！それにユーノ君！」

すると、部屋のドアが開きそこから看護師が入ってきて、私を見るなり慌ててどこかへと走り去っていった。

なのは（看護師さんがいるって事は、ここは病院！？でもなんで・・・あつ！そうだった、私達アリサちゃんに・・・。アリサちゃん怒ってた。でも何で？とにかくO H A N A S H Iしてみないと。）

しばらく考えごとに耽っていると、フェイトちゃんが目を覚ましたようだった。

なのは「ふ・・フェイトちゃん！」

フェイト「な・・なのは！」

フェイトが目を覚ましてしばらくしてから、医師と思われる人と看護師がやって来ていると事情を聞かれた。だが、アリサのことはなのもフェイトも喋らなかった。

# 《アリサ side》

今アリサ達は神殿のような場所にいる。ようなとは、それはただの神殿ではなく次元空間に漂う神殿だからである。その神殿の名は『せいれいでん星黎殿』、アリサの持つ宝具の一つだ。神殿の奥には玉座があり、そこにはギルバート・デモン・アークライトが鎮座している。アリサ達はその玉座を少し見上げるような感じで立っている。立つ影は全部で6人いる。そのうちの一人が喋りだした。

「????言っちゃったね」。あらら。俺はどうなっても知らんぜ」。

そう言ったのは、ライオット・アルビオという男だ。

???「少しは言葉を慎め、ナンバー6。ギル様の前だぞ。」

ライオット「ヘーヘー、分かりやしたよ。何だよ、俺より一個番号が上っただけで威張り散らしやがって。」

???「なんかいったか？」

ライオット「なんでもねーよ。サーシャさんよお。」

サーシャと呼ばれた女の名は、サーシャ・ヴァリアーノ。

???「ふつ、二人とも喧嘩はよくないですっ！ぷんすかぷんぷん。仲直りを」

ライオット「うつせーな、ガキが！」

???「ガビン！が・ガキじゃないですっ！わたしにはちゃんとミーアって名前があるんですよ。」

ミーアと言っている少女の名は、ミーア・アルラウネ。

ライオットはミーアの反応を見て腹を抱えて笑っている。

ライオット「かっかっか。にしても、マジでガキばっかだな。7

人中3人だぜ、大丈夫なんかよ？ギルさんよう。」

ギル「ふつ、戦闘経験はお前達より少ないがそこに秘めている力は量りしれん。侮らない方がいいぞ、特にその二人はな。」

ライオット「この俺がガキより身分がひけーのは気に入くわねえが、あんたがそういうなら大丈夫なんだろうな。」

サーシャ「お前はさっきから誰と話しているんだ。もう少しは言葉遣いをだな。」

ライオット「わーってるよ。」

そう言つと、ライオットはあたし達のほうへ向き直った。

ライオット「確かアリサ・バニングスとかいったな。テメーがナンバー3か、まあよろしくな。仲良くやってこーぜ。」

アリサ「こ・・・こちらこそ。」

ライオット「んな堅くなるなよ。もっと楽に接してくれ。そのシーナさんもよろしくな。」

シーナ「う・・・うん。」

《ライオットside》



ライオット（確かに・・・ギルさんの言う事だけはあるな。この二人から感じる重<sup>プレッシャー</sup>圧は相当のもんだ。・・・特にこのアリサ・バニングスは別格だ。本能が騒ぐ、こいつはやべえってな・・・。まあ、気に病むこたあねえな。こいつ等は味方なんだ、管理局の悪魔共は俺達が残らず潰してやる。）

俺は心の中で管理局に対する復讐の嵐を巻き起こしていた。

## 第16話「星黎殿」(後書き)

オリキャラ追加です。

キャラ・追加オリキャラ設定（前書き）

2011/3/28 一部改変

## キャラ・追加オリキャラ設定

キャラ設定

アリサ・バニングス

古代ベルカ式

魔力量クラス：overSSS

魔導師ランク：

変換資質：炎

希少技能：宝具使用、自在法  
レアスキル

使用デバイス：アラストール（ペンダント）

バリアジャケット詳細：緑色に縁取った白のチャイナ風ワンピースに、膝下までの長さの黒い薄手のコート『よがさ夜笠』を羽織った感じ。背中からは常に炎の羽が生えており、その中に菱形の石が等間隔に浮いている。イメージで言うと、シャナの紅蓮の双翼とフランドール・スカーレットの羽を足した感じ。

追加オリキャラ設定・オリキャラ設定

イルミナ・アレイズ

魔導師ランク：S -

魔力量クラス：AA

変換資質：氷結

使用デバイス：ヴィゾーヴニル（薙刀）

バリアジャケット詳細：黒の長袖、長ズボンに白のコート。

ギルバート・デモン・アークライト

ミッド式

魔力量クラス：A

魔導師ランク：S

変換資質：

使用デバイス：コスモクロア（籠手）

詳細：数年前に評議会の手によって理由もなく管理局を追放されてしまい、その後は凶悪犯罪者として管理局員に命を狙われていた。

バリアジャケット詳細：西洋風の黒い鎧 【鎧と言ってもそこまでゴツくない】 に白のマント。

サーシャ・ヴァリアーノ

ミッド式

魔力量クラス：A

魔導師ランク：

変換資質：

使用デバイス：アイスフォーゲル（スナイパーライフル、ハンドガン×4）

詳細：父と母は管理局員だった。二人とも評議会の存在に異議を申し立てていたが、それを邪魔に思った評議会によって殺されてしまった。評議会は二人の娘のサーシャも危険分子と判断し消そうとし

だが、管理局員のとときのギルバートによってそれを免れている。  
バリアジャケット詳細：紺色のつなぎ（作業着の）を腰まで着て、  
上半身は白のＴシャツ一枚。

シーナ・クジヨウ

近代ベルカ式

魔力量クラス：S

魔導師ランク：

変換資質：氷結

使用デバイス：アラハバキ（長さ2 m、幅40 cmの大剣）

詳細：管理局の暗部により、どこかの世界から連れて来られた。そのときに両親を目の前で殺されており、研究所に連れられた後は投薬などの実験の日々を過ごしてきた。

バリアジャケット詳細：スバル・ナカジマの上着・ハチマキが無い感じ。かなり薄着w。

ミーア・アルラウネ

ミッド式

魔力量クラス：B+

魔導師ランク：

変換資質：

使用デバイス：クォーツ（カチューシャ）

詳細：魔法は補助しか使用できないが、召喚術を使用できる。しかし、その力と彼女の性格故に、昔から差別を受けてきた。両親にも

捨てられ、一人で歩いていたところをライオットに拾われた。  
バリアジャケット詳細：白のワンピースの上に、ピンクのカーディガン。さらに白のフード着きマント。

ライオット・アルビオ

近代ベルカ式

魔力量クラス：A A +

魔導師ランク：A +

変換資質：雷、水

使用デバイス：メリヒム（大太刀、小太刀の計2本）

詳細：イルミナと同じく、爆発に巻き込まれた。その時は別の犯罪者を追っていたが、その犯罪者も管理局の差し金であることに気付き、自分を殺そうとした管理局の悪を滅ぼすためにシュツツリッターに入った。

バリアジャケット詳細：ジーンズにタンクトップ。その上に革ジャン。

第17話「月村すずか」（前書き）

連続で投稿しちゃったよ・・・大丈夫かなあ・・・俺。



## 第17話「月村すずか」

《なのはside》

自分が目を覚ましてから数日。あの放送があつてからシュツリッターの破壊活動は休むことなく続いていた。その間にはやても目を覚まし、ヴォルケンリッターも十分に動ける状態だった。だが、クロノは未だに目を覚ますことなく、病院の一室にいる。

そして、なのはと言うと、今はもう退院してフェイトと一緒にデバイスの状況を確認めに管理局本部第四技術部のマリーさんの所に訪れていた。

なのは「レイジングハート大丈夫かなあ？」

フェイト「バルディッシュもかなり傷ついちゃったし……。」

心配そうに呟きながら、技術部のドアをたたくと、マリーさんが出迎えてくれた。

なのは「レイジングハートの様子はどうなんですか？」

フェイト「あもう……バルディッシュも……。」

そんな心配をよそに、マリーさんは大丈夫といった雰囲気です。

マリー「特に問題は無いよ。少し損傷が多い様に見えるけどシステム、その他諸々には異常は無し。今からでも普通に使えるよ。」

なのは「あ・・ありがとうございますっ！」

マリー「いえいえ、私は特に何もしていませんよ。それじゃあ今からレイジングハートとバルディッシュを渡すからちよつと待っててね。」

そう言つて、奥の部屋に入つていった。しばらくして、あせあせとマリーさんが小走り気味にやってきた。

マリー「はい、レイジングハートとバルディッシュよ。何があつたのかは深くは聞かないけど大事にするのよ。」

なのは&フェイト「はい！」

そして、技術部を後にした。

次に訪れたのはリンディ提督のところ。既にユーノ君が来ていて、提督と一緒に迎えてくれた。部屋のなかにはレティ・ロウラン提督、ヴォルケンリッターの人達もいた。

リンディ「さ、座つて座つて。あなた達に話があるの。」

なのは「話？ですか・・・？」

フェイト「シグナムさん達はもう？」

シグナム「いや、我々もまだ話は聞いていない。まあ、予想はできるがな。」

ヴィータ「……………」

リンディ「そうね。多分シグナムさんの思っていることは正解だね。そう、アリサちゃんのことについてよ。」

リンディ提督がそう言った瞬間、部屋の空気は重くなった。

なのは「アリサちゃん……………」

リンディ「私の調べで分かったことを話すわ。まず一つ目、今アリサちゃんはシュツリッターに入っていること。二つ目、アリサちゃんはシュツリッターの幹部である可能性があること。三つ目、今の私達ではアリサちゃんを止められないということ。そして四つ目、今の彼女は利用されているのではなく自分の意思で戦っていると言うこと。これくらいかしら。」

ユーノ「そ、そんな・・・幾らなんでも、アリサさんがそんなことをする人では」

レティ「人っていうのはね、きつかけがあれば変わってしまうもの

なのよ。あなた達なら良く分かっているはずだわ。ヴォルケンリッ  
ターの方々は特に。」

シグナム「確かに、我々は今の主であるはやてのおかげで変わった。  
だが、今のアリサにはそんなきつかけが見当たらない。」

リンディ「いいえ、あるはずよ。アリサちゃんが攫われたあの日の  
ことをよく思い出してごらんなさい。」

フエイト「！・・・すずか。」

リンディ「そうよ。彼女にとってすずかちゃんが傷つく、ましてや  
死ぬ寸前の姿を晒されれば、ああなってしまう。アリサちゃんにと  
つてすずかちゃんはそれだけ大きな存在なのかもしれないわね。」

ザフィーラ「しかし、何故彼女はすずかを傷つけた張本人であるイ  
ルミナという男に着いているのだ？」

リンディ「おそらく、幻術の類<sup>たぐい</sup>ね。未だに幻術には謎が多いけど、  
そこらへんが一番怪しいわね。」

シャマル「確かに、今はまだ幻術を使える魔導師は少ないですから。  
・対処法もないですし。」

ヴィータ「ちくしょー！卑怯な手を使いやがって！」

怒りを抑えきれず今すぐにでもシュツツリッターに殴りこみに行  
きかねない状態のヴィータを静止させシグナムがリンディに問いか  
けた。

シグナム「・・・提督、我々に他に何か言うことがあってここに呼んだのではないですか？」

リンディ「察しが良くて助かるわ。」

シグナム「レティ提督がこの場にいることを考慮してのただの推測です。」

な、フ、ユ、ヴ「???」

シグナムとリンディ提督の二人だけで話が進む中、取り残されたなのは、フェイト、ユーノ、ヴィータが頭の上に？を三つ浮かべていた。

なのは「あもう、何のことを話しているのか分からないんですけど・・・。」

なのはの言葉に、他の三人もうんうんと頷く。

リンディ「ああ、ごめんなさいね、話が逸れてしまっていたわ。あなた達をここに呼んだのはお願いがあるからなのよ。」

ユーノ「お願い・・・ですか？」

リンディ「そう、アリサちゃんについてのお願い。レティ提督にはその協力をしてもらったのよ。」

フェイト「協力？」

レティ「そう、私は主に人事などを取り仕切る立場の人間だからリンディに頼まれて急遽、きゅうきょ対シユツツリッターの部隊を作ったのよ。苦勞したわ。」

リンディ「苦勞をかけたわね。・・・それで、お願いって言うのは、その部隊に入隊して欲しいのよ。どうかしら？」

なのは「・・・・・・・・。」

フェイト「・・・・・・・・。」

ユーノ「・・・・・・・・。」

長い沈黙のなか、一人静寂を破った者がいた。

ヴィータ「あたしは入る！」

なのは「ヴィータちゃん・・・。」

ヴィータ「あたしは、はやてやその友達を傷つけた連中が許せない。だから入る！」

次に動いたのはシグナムだった。

シグナム「フツ・・・なら、私も入ろう。」

フェイト「シグナム・・・。」

シグナム「テストロッサ、お前はアリサを取り戻さなくていいのか？ 大事な友達なんだろう？」

フェイト「！・・・私も入ります！」

ザフィーラは最初から決意が固まっていたらしくすんなりと入隊し、シャマルも「みんなが心配だから。」と、言って入隊を認めた。残るのは、なのはとユーノ。

なのは「どうしよう？ ユーノ君。」

ユーノ「それは、はのが決めることだよ。君はアリサさんを助けたくないの？」

なのは「助けたいよ！ でも・・・。」

ユーノ「大丈夫だよ。アリサさんも話せばきっと分かってくれる。心配することは無いと思うよ。」

なのは「わかった。私も入隊する！」

リンディ「これで決まりね。」

なのは「あれ、ユーノくんは？」

なのはがみんなの疑問を突いた。

ユーノ「あはは、実はみんなが来る前にこの話を聞いててそのときに・・・。」

なのは「ええー！」

なのはの驚いた声が部屋中に響き渡った。



## 第17話「月村すずか」（後書き）

連続投稿といふかなんというか、あと3話分ストックがあるんだけどね・・・ハハ。

## 第18話「シーナ・クジヨウ」（前書き）

まさかの3日連続投稿！

まあ、ストックが3話分になるように調整してるのでなんの問題もありませんがwww

まあそこらは置いてアリサさんどうぞー

アリサ「魔法少女リリカルなのは〜Flames〜、始まります」

## 第18話「シーナ・クジヨウ」

《なのはside》

なのは「ユーノくん、ずるーい。」

フェイト「ホントだよ。」

ユーノ「あはは、ゴメン。」

リンディ「はい、お話はそこまで。今から任務の詳しい内容を伝えるからちゃんと聞いてね。」

と言い、リンディ提督がスクリーンに管理世界のひとつを表示した。

リンディ「ここは第67管理世界よ。本当はここには何も無いはずなんだけど、どうやらここにも管理局の施設があるらしいのよ。」

シグナム「待ち伏せ・・・か。」

リンディ「そう言う事。ここで待っていれば必ずアリサちゃんは来るわ。そこで私達の任務はアリサちゃんの保護とその他のシュツツリッターの逮捕、保護よ。」

ヴィータ「簡単じゃねえか。とりあえずそのシュツツなんとかをぶ

つ潰せばいいんだろ。」

リンディ「そうね。それじゃあみんな準備して頂戴。準備ができ次第、出航するわ。」

みんな「了解！」

リンディ「それじゃあ解散！」

リンディ提督の一言で、全員が動き出した。

《アリサ side》

ライオット「ふい」。疲れた疲れた。」

サーシャ「今日お前はほとんど何もしてないだろ。」

ライオット「うっせー、うっせー。毎日こんなんで疲れが溜まってるんだよ。なあ、アリサ。」

アリサ「そうね。疲れた。」

ライオット「ほーら、アリサも疲れてるじゃんかよー。」

ミーア「違いますっ！アリサさんは貴方と違ってたくさん働いてるから疲れているんですよ。」

ライオット「チツ、シーナお前は疲れてるよな？」

シーナ「い、いえ、ボクはそれほど疲れてないです。」

ライオット「イルミナあー。」

イルミナ「俺も疲れてなどいない。お前はサボり疲れたんじゃないのか？」

ライオット「うぐつ、さ・・サボってなんかいねーし。」

こんな雑談をしながら、6人でアークライトの元へ向かっている。無論、次の任務の内容を訊きに行くためだ。

イルミナ「おい、今戻ったぞ。」

ギル「おお、お疲れ。次の任務は三日後だ。隊員の皆も疲れているだろうし、君らも疲れているだろ。少し休め。」

ライオット「ヒヤッホー！」

サーシャ「ギル様がそう言うのなら・・・。」

ギル「皆、自室に戻っていいぞ。」

と、言われたのでとりあえず自室に戻ることにした。

アリサ「ハァー、疲れたわね。特にすることも無いし寝ようかな。」

寝ようと思った矢先、ドアをたたく音が聞こえたので出てみることにした。

アリサ「だれ？」

シーナ「シーナです。少しいいかな？」

部屋に入ることを了承し、ソファに腰掛けるように促した。

アリサ「なにか用？」

紅茶を淹れながら用件を訊いた。

シーナ「ええつと・・・あの・・・その、ボクの事について話しておこうと思って・・・貴女のことについても話してくれない？」

アリサ「・・・・・・・・。」

シーナ「嫌なのは分かっていますけど、貴女のことを知りたくて・・・いつも独りで居て寂しそうだと思って・・・その・・・。」

アリサ「・・・わかった。」

シーナには全て話した。親友と呼べる友達がいたこと、その親友の一人が親友の手によって傷つけられたこと。自分は傷つけられた親友を守る力が欲しかったこと。その力で親友を傷つけてしまったこと。

アリサ「だからもう、後戻りはできないの。あたしは元々その覚悟でここまで来たんだから。」

シーナ「辛い事があったんだね。」

アリサ「うん、シーナは？」

シーナ「うん、ボクはね。もしかしたら、アリサと同じところに住んでいたのかもしれない。今から一年半くらい前にね、家に変な人たちが押し入ってきてね。そのときに目の前で父さんと母さんを殺されちゃったんだ。それからどこかへ連れて行かれて毎日実験だの投薬だので大忙し。正直苦しかった。逃げようとするとう電流が走る装置が首につけられてね、それで何度も気を失った。連れて来られて半年がたったら実権は終わりだ、とか言われてあの檻に閉じ込められたって感じかな。」

アリサ「・・・大変だったんだね。あたし以上に・・・。」

シーナ「そんな事無いよ。今は幸せだもん。」

アリサ「なんで？」

シーナ「ライオットやサーシャ、ミアみたいに面白い人達がいて、  
こうやって過去を語れる人もできた。だから幸せ。ボクはこの幸せ  
をずっと守りたい。」

アリサ「・・・そう。」

シーナ「アリサは今幸せ？」

アリサ「分からないわ。」

本当に分からなかった。今が幸せなのかどうなのか。



## 第18話「シーナ・クジヨウ」（後書き）

そろそろ、戦闘に入ります。長く続きそうですね。

先日久しぶりにアクセス見たらPV20,000越えてました。驚きです。

読んでくれる方々、ありがとうございます。

## 第19話「激突」

《アリサside》

三日経った。星黎殿の大広間にあたし達はギルが今回の標的を伝えるということで集められた。

ライオット「今回はどこなんだ？」

ギル「焦るな。今伝える。今回、行ってもらうのは第67管理世界だ。ここでも管理局の違法な実験が行われているらしい。君達にはここ施設の破壊だ。」

ライオット「破壊だけかよ、つまんねーな」

サーシャ「少しは口を慎んだらどうだ？」

ミーア「と・・とりあえず行きましようよ。」

シーナ「ほら、行こ？アリサ」

アリサ「うん、行こ」

イルミナ「転送魔法を展開するぞ、枠内に入らないと取り残されるぞ」

足元の円が輝きだし、視界が光に包まれる。視界が元に戻るとそこは竹林のような場所だった。

イルミナ「着いたぞ」

ライオット「やっと着いたか、ってもほんの一瞬だな・・・ほう、こいつは面白くなりそうだ。強そうな獲物が4〜5人いんじゃないかねえか」

イルミナ「ライオット、俺、アリサ、シーナは突っ込むぞ。サーシヤ、ミリアは後方支援だ！」

サ、ミ「了解（ですつ）！」

イルミナ「作戦開始！」

ライオット「突っ込むぜ！」

そしてあたし達は竹林を抜けた。

《なのはside》

第67管理世界に着いてから2日が経ったが未だに何も変化はない。今は全員アースラで待機中だ。管理局を出てから3日間シュツリッターは全く動いていなかった。

なのは「はあく、アリサちゃん・・・」

と、唐突に艦内に警告音が鳴り響いた。

なのは「な・・・何なの!？」

エイミィ『地上に転移魔法らしき反応2つ!おそらくシュツリッ  
ターです。皆さん、すぐに転送ポートへ!』

転送ポートに急いでいくと、既にフェイトちゃん、ユーノ君、ヴ  
イーちゃん、シグナムさん、シャルさん、ザフィーラさん、ア  
ルフさんがいた。ってアルフさん!？」

なのは「アルフさん、なんでここに?」

アルフ「そりゃあフェイトが心配だからだよ。あんたもね」

なのは「にやははは」

エイミィ「みんな揃ったね!?!じゃあ転送するよ!」

転送先は、研究所みたいなところの上空だった。

《ライオットside》

竹林を抜けると、研究所が見えた、が俺はそんなものに興味はねえ。研究所の上にいるやつらから物凄い力を感じる・・・いいだろう、俺のメリヒムの錆にしてやるぜ！

ライオット「うおりやーーーーー」

俺は高速でやつらに切りかかる。だが、反応がいいやつがいた。ピンクの髪を持つ女だ。

ライオット「へへへ、いい腕もってんじゃねえか・・・だが、まだ甘いな」

俺は右手に持つ小太刀で切りかかる。しかし、ピンクの女はそれを軽々しく避ける。

ライオット「ちっ、勘がいいようだな」

シグナム「伊達に長くは生きていないのでな。貴様の剣ぐらい易々と見切れる」

ここで金髪の女が間に入って来た。

フエイト「武装を解除して、今すぐ投降を！今ならまだ弁護の余地があります！」

弁護の余地？んなもんいらねえ、俺は戦いたただけだ、この強そうなやつらと・・・そして潰す、管理局を。

ライオット「うつせー。俺を止めたいなら、俺と戦って勝て！」

フエイト「話を」

シグナム「無駄だ。言葉で彼をとめる事はできん」

フエイト「し、シグナム・・・くっ、なんとしてでもあなた達を止めます！行くよ、バルディッシュユ！」

(Yes , sir!)

ライオット「なら先ずは金髪の女が相手か・・・久しぶりに楽しませてもらうぜえ！」

俺はメリヒムの大太刀に水を、小太刀に雷を纏わせ、金髪の女に突っ込んだ。

《アリサside》

どうして・・・どうしてなのは達がここに居るの!?ま・・・まさか、なのは達も管理局の違法な研究に加担してるって言うの!?・・・許さない・・・絶対に許さないっ!

アリサ「なのはあああああああああああ!」

なのは「あ、アリサちゃん!？」

『夜笠<sup>よがさ</sup>』から『贄殿遮那<sup>にえこのしやな</sup>』を取り出して、なのはに切りかかる。なのはは反応しきれていないのか全く動かない。

アリサ（チェックメイトね）

そう思ったが、シグナムに受け止められてしまった。さっき、ライオットと剣を交えていた気がするが、今ライオットと戦っているのはフェイトだった。

アリサ「くっ!」

シグナム「甘いな、殺気が強過ぎる。紫電一閃!」

アリサ「がっ!」

何とか『にえとののしやな贄殿遮那』で受けきったが、腕がジンジンする。

シグナム「魔力量が桁外れとはいえ、所詮はこんなものか……。剣技はそれなりに出来ているが、実戦の経験が足りないな」

アリサ「……フレイムファング！」

炎の翼から、赤色のファングが6つ飛び出す。

なのは「アクセルシューター！」

しかし、なのはのアクセルシューターにより、全て打ち落とされてしまった……。ように見えたが、元々魔力弾でないフレイムファングは傷ひとつ付いていない。

なのは「え！？」

アリサ「……斬りかかれ」

その言葉とともにファングの先端から赤い魔力刃が飛び出す。

シグナム「ここは私に任せて、あなたは後方支援を！」



なのは「は、はい！分かりました！」

アリサ「逃がさないっ！」

シグナム「行かせるか！」

シグナムと鰐迫り合いになる。が、刃を出したファングがシグナムに向かって突撃する。

シグナム「くっ、厄介なものを・・・」

いち早く、シグナムは反応し、後ろに一步引いてファングを切り伏せてしまった。

アリサ「くっ、うおおおお！」

シグナム「うおおおお！」

また鰐迫り合いの形になる・・・と、思いきや、アリサの『にえとの贄殿のしやな』が弾き飛ばされてしまった。手元を離れた『にえとのしやな贄殿遮那』は弧を描き、回転しながら地面に突き刺さった。

シグナム「もうやめろ・・・お前にもう戦う術はない」



## 第19話「激突」(後書き)

やっと戦闘が始まったよ。でも意外と戦闘の描写が難しい。修行する必要があるな。

## 第20話「勝機」(前書き)

未投稿のお話に一部改変があったので、更新の期間が延びました。  
すいません。

キャラ・追加キャラ設定を一部改変いたしました。

作者「それではアリサさん、いつものをどうぞ!」

アリサ「魔法少女リリカルなのは〜FlameS〜はじまります」

## 第20話「勝機」

《ライオットside》

さっき居たピンクの女が居なくなっていた。辺りを見回すとそいつはアリサと戦っているようだった。

ライオット（あいつ、かなりの腕だったな・・・だが、アリサも負けねーだろーな。剣術はほぼ俺が教えたんだし。）

フェイト「余所見とは、余裕ですね」

金髪の女が斬りかかってくる。俺は小太刀の方でそいつを受け止めつつ水を纏わせた大太刀で斬りかかる。が、しかし、避けられる。

ライオット「さっきからちょこまかちょこまかと避けやがって、いい加減当たりやがれ」

フェイト「当たる訳にはいかないっ！」

金髪の女が避けるせいで刀を空振る。空振る際に態と隙を作っではいるが、罠と気付いているのか、なかなかあっち側から攻撃してこない。と、思っているといきなり後ろから衝撃がきて50mほどぶっ飛ばされた。

ライオット「くゝ、痛ってゝ。一体何なんだよ？」

と、金髪の方を向くと、全身赤のチビが身体のわりにデカイハンマーを持っているのが見えた。

ヴィータ「作戦せーこー」

フェイト「うん！」

ハイタッチしているのが見えた。なんかムカつく。地面に磔<sup>はりつけ</sup>になった俺はやや呆れた感じで呟く。

ライオット「ちっ、仲間が居やがったか。くっそ、シーナ達は何してる」

シーナ「呼んだ？」

背後というより、頭の上から掛かった声に反応し、見上げてみるとその声の主であるシーナが突っ立ってこちらを見下ろしている。

ライオット「何してた？」

シーナ「見てた」

ライオット「手伝えよ！」

シーナ「下手に手伝わと、貴方の機嫌を損ねるかと思って・・・」

ライオット「あーそーかい、なら手伝ってくれ」

シーナ「分かった。ボクはどっちを？」

ライオット「あの赤いのだ」

シーナ「りょーかい」

ライオット「イルミナは？」

シーナ「アレンは緑の2人と犬2匹と戦ってる」

ライオット「救援は・・・いらねーな（ぐへへ、やられてしまえ）」

シーナ「貴方の顔が怖いです」

ライオット「うつせー、行くぞ」

シーナ「はい」

するとシーナは金の棒を持ったかと思うと、その金の棒は刃が2mはある大剣に変わった。

ライオット「いつも思っけど、どうやったらそんなモン振り回せんだ？」

シーナ「禁則事項」

シーナの返事にツッコミは入れずに、金髪の女に斬りかかった。

《アリサside》

シグナム「もうやめろ・・・お前はもう戦えない」

『にえとのしやな贗殿遮那』が弾かれて、地面に突き刺さってしまった。そこで一旦シグナムと距離をとる。

シグナム「あの刀を取りに行かせるほど、私は甘くはないぞ」

シグナムはもう勝ったと思っていたのだろう、攻撃を仕掛ける様子はな。だが、こちらはまだ戦える。なぜなら

アリサ「あたしの宝具が『にえとのしやな贗殿遮那』だけとは思わないことね」



そう、『にえとのしやな贄殿遮那』意外にも宝具はある。例えばこの

アリサ「『ブルートザオガー吸血鬼』みたいだね」

シグナム「ふつ、私にあえて剣で立ち向かうとはいい度胸だ。」

アリサ「はあああああああああああああ！」

シグナム「大剣では必ずと言っていいほど、振りが大きくなる。軌道を読み、避ければ大したことはない」

シグナムはあたしの『ブルートザオガー吸血鬼』の軌道を読み、少し身体を反らす。見事に空振りに終わるアリサの一撃。

シグナム「ほうら、行ったとおりだ」

そっいいながら、レヴァンティンを振り下ろすシグナム。

アリサ「ガハッ！？・・・くっ」

なのは「アリサちゃん！」

シグナム「大丈夫だ、安心しろ。今のは峰打ちだ。だが、次はないぞ」

シグナムの警告を無視して、『ブルートザオガー吸血鬼』を再び構える。

なのは「アリサちゃん・・・ごめん！ディバイーン、バスター！」

アリサ「！」

ディバインバスターを難なく回避。すると、なのはがピンクの光球を12発ほど宙に浮かべていた。

なのは「どうやってでも、お話を聞いてもらおうよ！アクセルシューター！」

なのはの脅威は威力の高い直射型と数の多い誘導射撃魔法。その二つを防げば、然さして脅威はない。砲撃を無効にするという便利な宝具は無いが、手段が無いわけではない。

アリサ「『レギュラーシャープ』！」

シグナム「まだ宝具が！？・・・あれは、トランプ？」

アリサ「ただのトランプじゃない。これは魔力を込めれば幾らでも増える」

だが、幾らでも増えるだけでそれ以外はただの変哲もないトランプだ。だが、使い方によっては攻撃にも使えるし防御にも使える。そして今は防御だ。なのはがこちらに向かつて放つアクセルシューターをアラストールの制御で誘導し、アクセルシューターを確実に防ぐ。

シグナム「厄介なものを・・・」

アリサ「・・・・・・・・」

もう一度『ブルートザオガー吸血鬼』をシグナムに向かつて構える。

シグナム「やめておけ、そんな武器でお前に勝ち目は無い！」

アリサ「正攻法ならね」

そう、作戦は幾らでもある。今はまだ、そこまで大量に出せないけどアレがある。それに、『ブルートザオガー吸血鬼』は直接相手の体に当てなくても間接的になら効果がある。

アリサ「勝機はある」

## 第20話「勝機」(後書き)

もう20話まで来ちゃったよ。  
だいたい今は中盤くらいかな。

## 第21話「自在法」

《シグナムside》

アリサの顔が妙に自信に満ちていて嫌な予感がする。今までの経験上この嫌な予感は当たる。常に警戒していたほうがいいだろう。最悪後からの不意打ちもあり得る。ここは様子見に徹しよう。

《シーナside》

ライオットが金髪の少女に斬りかかったのを確認してから、赤い服を着た子に向き直る。あちらはボクに気付いているようだ。

ヴィータ「そんなでけえのちゃんと使えんのか？」

シーナ「使えるに決まってる。じゃないとこんなもの持たない」

そう答えつつ刃が2mはある大剣、アラハバキを持ち上げる。すると、赤い子が指に鉄球を4つつはさんでいた。

ヴィータ「シュワルベフリーゲン！」

(Schwalbefliegen!)

赤い子が鉄球を打ち出した、ボクは咄嗟<sup>とっさ</sup>に大剣を盾代わりに突き出す。2発着弾したが、あとの2発が来ない。と、辺りをキョロキョロ見回していると背中と下腹部に交互に着弾した。

シーナ「うぐっ！」

ヴィータ「へへ、トロいな。これなら早々にぶっ潰せるぜ！いくぞ、アイゼン！」

(Jawohl！)

ヴィータ「カートリッジ、ロード！」

赤い子がハンマーを振り回し始めた。

ヴィータ「ラーケテンハンマー！」

ハンマーの後ろの部分をロケット噴射させながら突っ込んでくる。ボクは大剣の刃の側面を盾に、相手の攻撃に備える。

ヴィータ「うおりゃあああああああああああ」

シーナ「くっ！」

ヴィータ「このままだと折れちまうぜ！」

しかし、いつまで経っても大剣に罅がはいることはない。しかも、傷一つ付いていないのだ。

ヴィータ「な・・・なんだよコレ、かてえ」

シーナ「君の打撃って、そんなもの？」

ヴィータ「うるせえ！アイゼン！」

(Jawohl！)

赤い子のデバイスがカートリッジを一つ消費する。すると、今までよりほんの少し威力が強まった。

シーナ「やるね、でもそんな力じゃボクを潰せないよ？ハアッ」

大剣を振り回し、赤い子を投げ飛ばす。空中で体制を立て直しているのが見えたがそれは200mほど先。つまり、ヴィータは200m投げ飛ばされたのだ。

ヴィータ「何なんだ、何なんだよあいつ！」

## 《アリサside》

『フルートザオガー  
吸血鬼』を構えを一度解き、内にある膨大な魔力を練る。シグナムはそれに気づき警戒を強化している。

アリサ「実戦で使うのは初めてだけど、自在法『騎士団<sup>ナイツ</sup>』！」

シグナム「自在法！？」

アリサの周りを紅蓮の炎が取り巻き、その炎の中から中世の騎士を思わせるような騎士甲冑が5体生まれる。

シグナム「何だ！？あれは」

生まれでた騎士達は己が武器を持ち、主の命を待つように身構えている。

アリサ「行け！」

アリサの声と共に飛び出す騎士達。ランスや剣がシグナムに向かって突き出される。



シグナム「くっ！」

流石のシグナムでも1対5、さらに騎士達の武術も達人の域に達する腕前。すぐにシグナムは切り伏せられ、地面に叩きつけられる。

シグナム「がはっ！」

アリサ「どうしたの？もう終わり？」

シグナム「あれだけの制御をしているんだ。アリサ自身は動けないはずだ！高町い！」

なのは「準備は出来てます！ディバイーン、バスター！」

既にチャージを終えた砲撃がアリサに向かって放たれる。『レギユラーシャープ』もいつの間にかすべて撃ち落とされていた。それを含めての”準備”だったのだろう。

アリサ「しっ、しまった！」

ピンク色の極太の砲撃は、アリサのすぐそこまで迫っていた。炎の騎士達はアリサから離れていてとても<sup>かば</sup>庇える距離ではない。

シグナム「戦いの最中に気を抜くのは負けも同然。私の勝ちだ」

アリサ「やられるっ！・・・な訳無いでしょ」

アリサは片手を砲撃に向かって翳し、障壁を張る。涼しげな顔でデイベインダスターを防がれたのはは驚愕の表情で固まる。

シグナム「馬鹿な、人間の形をした魔力の塊を5体も制御しながら何故動ける！？」

アリサ「そんなの決まってるじゃない」

騎士から『贅殿遮那』にえとのしやなを受け取りつつ続ける。

アリサ「あたしが制御してないから、あたしは動ける。」

そうかと、気付き唇を噛み締めるシグナム。

アリサ「こいつ等は自立的に戦闘ができるの。便利でしょう。自在式は、ミッドやベルカの術式とは格が違いすぎるのよ」

## 第21話「自在法」(後書き)

今回は短かった気がするけどまあいいか

## 第22話「吸血鬼」

### 《イルミナside》

今日の前には、緑2人と犬2匹がいる。4対1は流石の俺でも分が悪い。とか考えていたら、相手の方が話を持ちかけてきた。

ユーノ「あなた達は何でこんなことするんです!？」

アルフ「そーだ!こんなことに何の意味があるんだい!？」

イルミナ「貴様らには永遠に分からん。管理局で使い潰され捨てられた者の思いなど・・・」

そこで思い返す、昔あったあの出来事を。

シャマル「何ですって!？」

ザフィーラ「それはどういうことだ？」

イルミナ「だから言っただろう、貴様らには到底理解できん」と

ユーノ「あなたは何を言いたいんだ!？」

イルミナ「お前らのように管理局の闇を知らない連中は、黙って見

ていればいいんだ」

アルフ「あんたの言うことなんか聞けるかってんだ！」

イルミナ「俺はあまり関係の無い人間を傷つけたくない。去れ」

シャマル「すずかちゃんを傷つけたあなたの言える台詞ですか!？」

イルミナ「あれは代償だ。管理局の闇を潰すためのな」

ザフィーラ「貴様!」

イルミナ「俺も最初は嫌だったさ。10歳くらいの少女を傷つけるのは」

アルフ「ならあんなことしなくても」

イルミナ「無理だな。今の俺達の戦力では到底管理局に対峙できない。アリサの力が必要だったのだ」

ユーノ「それなら別のやり方があったんじゃないのか!？」

イルミナ「探したさ、幾らNo.1の命令とはいえ俺にそんな度胸は無かったからな」

ザフィーラ「何がお前をそうさせた？」

イルミナ「過去だよ……俺の過去だ。あんなことを2度と繰り返させないためなら、俺はどんな手段を使っても管理局の闇を潰すと心に誓った。それに、これはもしかしたらお前達のために

もなる」

シルヴァ・ロムウエム大佐や死んでいった仲間達の最後の光景が脳裏に浮かぶ。

アルフ「あたし達のためって、どういことだい!？」

イルミナ「犯罪者なんだろう。あそこの白いのとお前を除いて」

アルフ「それがどうしたって言うんだい!」

イルミナ「お前たちも何れ用済みになるかもしれないんだ。だが、闇を潰せばその心配はなくなる。いい話じゃないか。どうだ、手を組まないか？」

ザフィーラ「4対1で不利を悟ったか。そんな口車に乗るほど我らは甘くない」

イルミナ「ならばしょうがない。全力で俺を止めてみる!俺は一人じゃない!」

遙か後ろからの援護射撃がくる。サーシャの精密射撃だ。しかも威力をミリアの魔法で上げている、一発あたっても相当の魔力ダメージを受けるはずだ。だが流石は噂に聞くヴォルケンリッター。頑丈な盾を使うやつがいる。

研究所ではシュツツリッターの下っ端が破壊活動をしているのを視認できた。

俺はヴィゾーヴニルを起動させ、目の前のやつらに斬りかかった。

《ヴィータside》

投げ飛ばされた後、やっとのことで体制を立て直したが相手から200mほど離れてしまった。

ヴィータ（何なんだアレは、化け物か！？とりあえず、ギガント級の技で試してみねえとアレの強さが分かんねえ。）

ヴィータの意思で、グラーファイゼンのカートリッジがロードされる。直後、グラーファイゼンのハンマーが巨大化し、相手を叩き潰すために振り上げられる。

ヴィータ「これでブツ潰れる！ギガントシュラーク！」

振り上げられたハンマーはさらに大きくなり、相手に向かって振り下げられた。

《シーナside》

しばらくしても相手の動く気配が無かったので、アラハバキ大剣を地面に刺

して寄りかかっていた。すると、突然カートリッジをロードしたので慌ててアラハバキを抜き取り攻撃を待った。

シーナ「砲撃が来るのかな。でも、ベルカ式はあまり遠距離の攻撃魔法は得意じゃないはず、って昔研究者が言ってたなあ」

警戒しながら様子を見てみると、赤い子の持っているハンマーが巨大化しこちらに振り下げられてきた。

ヴィータ「これでブツ潰れる！ギガントシュラーク！」

ハンマーが200mほど離れたこっちに届くはずも無いと思っていたが、勝手が違うようだ。

シーナ「持ち手まで伸びるなんて、そんなのアリなのか？」

愚痴をこぼしつつ、迎撃のためにアラハバキを振り上げる。鈍い金属音の後、ぶつかるデバイス同士の間から火花が散る。

シーナ「なんて重い一撃。これは少しきついかも」

いくら体を改造され力が強くても、振り下げられる大質量の物の



重力には敵わない。一瞬の判断でアラハバキを斜めに反らし、何とか難を逃れる。

シーナ「うあー、危なかった」

逸れた打撃は地面を打ち、大きなクレーターを作った。

シーナ「コレ当たったら、流石のボクでも骨折くらいでは済まなさそうだな」

赤い子はハンマーを引き戻し、こちらに突っ込んでくる。シーナもアラハバキを構え、迎撃に備えた。

《アリサ side》

シグナムが起き上がり、レヴァンティンを構えるがシグナムの体はもうボロボロだ。

アリサ「もうやめた方がいいと思うわよ。あんた達に勝ち目は無い。大人しくあたしに殺されなさい」

だが、相手の二人は諦める様子も無く。再び己のデバイスを取り、

救うために戦おうとする。

シグナム「勝ち目が無くとも、諦める訳にはいかない！」

なのは「絶対にアリサちゃんを止めるの！」

二人の言葉に動揺が隠せないアリサは悲痛な面持ちで二人に問いかける。

アリサ「なんで？何でそこまでしてあたしにこだわるの！？あたしはたくさんの人を傷つけてきたんだよ！それになのは達だって！」

なのは「そんなの関係ない！アリサちゃんは・・・アリサちゃんは私のかげがえの無い親友だから！無くしたくないの！」

シグナム「それに、あなたが居なくなれば主はやてが悲しむ。主の悲しむ姿は見たくない！」

一瞬戦意が喪失しかける。だが、シーナ達の顔が浮かぶと自ずと武器を握ってしまう。迷いが頭の中で巡る中、なのははここぞとばかりに言葉をぶつける。

なのは「早く帰って来て！みんな待ってるんだよ！すずかちゃんだって待ってる！」

アリサ「さすがが………待ってる？」

余計に頭が混乱する。頭の中が考えて埋め尽くされる。

アリサ（さすがが待ってる！？そんなはずない、だってあいつらはさすがを………殺そうとした！だから今度はあたしを………そうか、そう言うことだったのね。簡単じゃない）

アリサ「そんな言葉で惑わせて、あたしを殺すつもりなんですよ！？」

二人はアリサの思いがけない一言に顔をしかめる。

アリサ「あたしはそう簡単に騙されない！騎士団<sup>ナイツ</sup>、行きなさい！」

アリサの命令で5体の内3体がなのはの方へ、残り2体がシグナムの方へ飛び出す。アリサも右手に『贄殿遮那<sup>にえこのしやな</sup>』、左手に『吸血鬼<sup>ブルートザオガ</sup>』を構え、シグナムの方へ斬りかかる。

《シグナムside》

シグナム「さっきより手数が減っただけマシか。くっ！」

アリサ「はあっ！でいや！」

フルートザオガー  
『吸血鬼』の一撃をレヴァンティンで弾いたその瞬間。斬撃がシグナムの体を切り裂く。

シグナム「ガハッ………アリサに気を取られすぎたか……いや、それにしては攻撃の角度がおかしい！何が起きた！？」

シグナム（周りの騎士達がやったのだとしたら、ガラ空きの脇腹や背中に傷がつくはず）

シグナム（なのに何故、胸に傷が付くんだ！？）

## 第22話「吸血鬼」(後書き)

執筆に夢中で投稿を忘れてたぜ

## 第23話「戦う理由」

《アリサside》

アリサ「思いがけない場所へのダメージで驚いてるんでしょう？」

その言葉にシグナムは、はっと顔を上げアリサを睨む。そして問  
いかける。

シグナム「今、何をした？」

アリサ「その質問に答える義理はないわね。騎士団！」  
騎士団！

騎士団が再びシグナムに向かって攻撃を開始する。シグナムは防  
戦一方で攻撃を全くしてこない。なのはの方をちらりと見るが、状  
況はシグナムと変わらないようだ。

アリサ（二人が動けなくなっただけでトドメを刺せばいい。無理  
に攻めて手傷を負うのは嫌だしね）

高見の見物を決め込むことにした。

《ライオットside》

ライオット「オラ！」

フェイト「くっ！」

二人のデバイス同士が交差し花火を散らす。ライオットは空いた左の大太刀に水を纏まとわせ横に薙ぐ。フェイトはいち早く反応し、鐔迫り合いを解き距離をとりつつプラズマランサーを8発セットする。

フェイト「プラズマランサー、ファイア！」

8発の光弾がライオット目掛けて放たれる。ライオットは直線的な射線を描くプラズマランサーを難なく避け、大太刀から伸ばした水の鞭むちをフェイトに向かって振り下ろす。フェイトはギリギリのところでそれを避け、プラズマランサーに指示を送る。

フェイト「ターン！」

ライオット「ターン？……まさか！」

後ろを振り返るライオットだが、既に遅く着弾を許してしまう。

ライオット「ぐっ！・・・やるじゃねえか。てめえ、名前はなんて言うんだ？」

フェイト「フェイト・Ｔ・ハラオウンです。あなたは？」

ライオット「俺はライオット・アルビオ」

フェイト「アルビオさんは何でこんな事を？」

ライオット「そりゃ、今の目的は強えヤツと戦うことだからな。正直、施設の破壊活動みたいなつまらねえことはやりたくないんだ。お前と戦ってた方がおもしろい」

フェイト「では質問を変えます。何故シュツリッターに？」

少し間を置いて答える。

ライオット「復讐のためだ」

フェイトの顔が少しばかり引きつる。

ライオット「俺はな、管理局の上層部に邪魔者扱いされてたんだよ。そして消されかけた。家に帰ってみたら家族は殺されていたよ、管理局にな。でも局の書類上では居もしない架空の犯罪者に殺されたことになってたな。」



フエイト「復讐ということは・・・」

ライオット「俺の殺人未遂と家族の仇。それだけだ」

フエイト「管理局がそんなことをするはずが無い！」

ライオット「そんなことを言えるんなら、お前は局内で真面目に働かないヤツだ。だが、管理局も一枚岩じゃねえ。俺らはその中の闇を打ち倒すためにこうやって戦ってる」

フエイト「管理局の・・・・・・闇？」

ライオット「ああ、そいつらは次元犯罪者の研究員の一人を雇っていたな。確か名前はジェ・・・・なんだっけ？まあ、俺らはそういった一氣に摘発して、復讐を果たす」

フエイト「その闇の人たちを捕らえたらどうするつもりなんですか？」

ライオット「もちろん、殺す」

フエイト「そんなことはさせません！」

ライオット「ヤツらの味方になるってのか？」

フエイト「いいえ、あなたのような人に人殺しの罪を課したくないからです」

ライオット「止めるっつーんなら、俺を殺しても止めるんだな！」

そう言いつつ、左の大太刀で斬りかかる。フェイトはバルディッシュでその攻撃をいなす。

フェイト「絶対に誰も殺させません。もちろん、あなたも」

ライオット「理想論だな。……興が殺<sup>そ</sup>がれた。そうだ、一つ忠告しておく。死にたくなかったら、管理局を離れる。それだけだ、じゃあな」

俺は転移魔法を使い、合流地点へと向かった。

《イルミナ side》

今の状況を言うと、ユーノ、アルフ、シャル、ザフィーラの4人は地面に縛られている。

イルミナ「呆気ないな」

ユーノ「何だこのバインド、硬すぎるっ」

ザフィーラ「くっ、壊せん！」

シャル「私達をどうするつもり!?!」

イルミナ「どうもしないさ。もう作戦は終わったからね。ちなみにそのバインドはあと10分経てば自然に壊れるから安心しろ」

転移魔法を発動させ、先ずシーナの元へ向かった。

## 第23話「戦う理由」(後書き)

ちょっと見直してみると短い気がするけどまあいいか

## 第24話「虹天剣」

《シーナside》

大剣とハンマーのぶつかり合う音が2、3度続き、二人は距離をとる。二人とも息を切らしていて、お互いボロボロの状態だ。

シーナ「はあ．．はあ、ボクを息切れさせるなんて、はあ．．はあ、初めてだよ」

ヴィータ「の割には、ぜえ．．はあ、随分と余裕そうじゃねえか」

お互いに最後の力を振り絞って、再び激突しようとする。そのとき、二人のデバイスの間に抑制が働く。

ヴィータ「て、てめえ！」

二人のデバイスを抑えていたのはイルミナだった。

シーナ「何するの？アレン」

イルミナ「今回の目的は果たした。帰るぞ」

シーナ「分かった。決着はお預けだね、赤ちゃん」

ヴィータ「赤ちゃんじゃねえ！ヴィータだ！」

シーナ「へえ、ヴィータちゃんね。ボクはシーナ・クジヨウって言うんだ。じゃあね」

ヴィータ「ちょ、待ちやがれ！」

ヴィータはシーナとイルミナに向かってグラーフアイゼンを振るうが、空振りに終わった。

《アリサ side》

シグナムとなのはは騎士団<sup>ナイト</sup>と一進一退の攻防を繰り返していたが、体力が尽きてきたのか防戦一方になってきている。

アリサ「そろそろ終わりのようね」

トドメを刺すために自在法を発動させる。

アリサ「『紅蓮<sup>ぐれん</sup>の大太刀<sup>おおたち</sup>』っ！！」

『贅殿遮那』とアリサの手の間から溢れるように炎が湧き出し、それはアリサの身の丈の数倍に及ぶ炎の大太刀に変わる。それをシグナムとなのはに向かって振り下ろされようとする。

アリサ「はああああああ！！！」

シグナムとなのはは騎士団ナイツに身動きを封じられ、避けることもままならない。

なのは「きゃあああああ！」

シグナム「くっ、ここまでか！？」

アラストール「！アリサ、上だ！！！」

アリサの放つ紅蓮の大太刀が当たろうという瞬間、アラストールの声で上を向いたアリサの体は白い光と共に吹き飛ばされ、地面に思いつき叩きつけられる。

アリサ「が・・・はっ」

なのは達が白い光の元を目で辿ると、そこにははやてがシュベルトクロイツを振り下ろし佇んでいた。

はやて「ごめんな。でも、これ以上アリサちゃんの罪は重くさせられへん」

その姿にシグナムとなのはは驚きを隠せない。

はやて「間に合ってよかったわ。先ずはそのなのはちゃんとシグナムの周りにおける邪魔者を消さんとな」

はやては呪文の詠唱を始める。

はやて「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け。石化の槍、ミストルティン！」

白い光は5体の騎士に当たり、騎士達はそのまま石化し崩れていく。

シグナム「主はやて、お体の方は大丈夫なのですか？」

はやて「へーきや、へーき。さて、アリサちゃん。もうやめにせんか？こんなことに意味なんて無いで？」

なのは「アリサちゃん・・・」



アリサは『贄殿遮那』にえとのしやなを地面に突き立て、フラフラと立ち上がる。

アリサ「うる・・・さいっ！自在法・・・」

『贄殿遮那』にえとのしやなに虹色の炎が灯り、その炎がしだいに大きくなる。

アリサ「虹天剣！！」

一閃させた『贄殿遮那』にえとのしやなの軌跡に沿って直線の光線が放たれる。  
なのは、はやて、シグナムの三人はギリギリのところで掠らずに避けきる。威力を弱めることも無くそのまま一直線に延びた光線は山に直撃し、山を上半分消し飛ばした。

はやて「なんつー威力や！？」

なのは「スターライトブレイカーより威力が大きい」

シグナム「掠っても腕の一つや二つ、簡単に吹き飛ばかしれん。  
これが自在法の力なのか！？」

アリサは再び虹色の炎を『贄殿遮那』にえとのしやなに纏わせ、もう一度『虹天剣』を放とうとするが

アラストール「それを撃つてはならん！慣れない魔力量の消費で体が持たんぞ！」

アリサはアラストールの警告も耳に入っていないのか、ふらつきながら『贅殿遮那<sup>にえとのしやな</sup>』を一閃。今度はどこにも当たることなくそのまま空の彼方へと消えていった。

アリサ「うつ」

バサリと地面に倒れるアリサ。体力が尽き、体に力が入らない。意識が遠のく。最後に見たのは本当に心配そうにする、なのはとはやての顔だった。

《はやてside》

はやて「これは慣れない量の魔力を消費して気を失ってしもうたか。でも、山半分吹き飛ばすって、どんな威力やねん」

シグナム「しかし、アリサが何も無い空間に誤射したおかげでどこにも被害は出ず、さらに今、アリサは動けない」

なのは「今のうちにアリサちゃんを保護しないとね」

三人はアリサに近づき、エイミィに連絡を取ろうとする。

アラストール「アリサに触れるな！」

はやて「なんや、なんや？今はシグナムか？」

シグナム「いえ、私では」

シグナムがそう言うので、必然的になのはの方を向く。

なのは「私じゃないよっ」

アラストール「この子は貴様らには渡さんぞ！」

よく耳を澄まして聞くと、アリサの胸の辺りから声がした。

はやて「うわ、もしかして喋ったんはこの宝石かいな」

アラストール「わっ、我にも触れるな！」

はやて「なんや、おもしろいな。そうや、シグナム、その武器二つとも回収や」

アラストール「貴様らにはやらん！」

シグナム「ああっ」

宝石が喋ると、二つの剣は吸い込まれるようにアリサの黒いコートに入ってしまった。はやてはそれをひらひらさせながら問う。

はやて「なんやこれ、どうなってるん？」

アラストール「貴様らに教えても何の価値も無い」

はやて「なんや、連れへんなあ」

そうこうしている内に、エイミィさんから転送の準備が出来たと連絡があったのでついでに自分達もアースラに引き返すことにした。

「そうはさせない」

影が一瞬目の前を通りすぎると、既にアリサの姿は無くなっていた。

はやて「だれや!？」

はやてが叫ぶと一人の少女がアリサを担いで歩いてきた。

シーナ「アリサは渡さない」

なのは「返して！」

シーナ「返さない」

なのはの叫びに即答するシーナの隣に一人の男が降り立つ。

なのは「あなたは、イルミナさん！」

イルミナ「君達にアリサを渡すことは出来ない。さらばだ」

はやて「ちょ、待ちい！」

イルミナははやての言葉を無視して転送魔法を発動させ転移してしまった。

はやて「あのイルミナって人と話をせなあかんかもな」

第24話「虹天剣」(後書き)

う・・・腕が・・・。

## 第25話「再戦」

《ライオットside》

イルミナ達と合流地点で合流したあと、『星黎殿』に帰還した。  
アリサは部屋のベッドで寝かせてある。

ミリア「慣れない量の魔力消費で体に負荷がかかってしまったようですね」

ライオット「……………」

シーナ「心配してるの？」

ライオット「うつせー、そんなんじゃねえよ」

サーシャ「本当はすごく心配なんだろう？」

ライオット「ち、ちげえよ！」

ミリア「ライオットって仲間に対しては物凄く過保護になるよね」

こんなやつらに付き合ってられない俺は、早足でギルバートのもとへ向かった。

いつもの広間に着くと、ギルバートがいつものように玉座に腰掛けてふんぞり返っている。俺の後に他のやつらも揃ったようなので

話を始める。

ライオット「次の作戦は？」

ギル「第37無人世界だ。たぶんここで違法な研究所の破壊は終わりだ」

ライオット「その次は？」

ギル「地上本部と本局だ」

ライオット「いよいよここまで来たんだな」

ギル「ああ、お前達には苦勞を掛けた」

イルミナ「では行つて来る」

ギル「ああ」

俺達は第37無人世界へと飛び立った。

《アリサ side》

目が覚めるといつもの部屋に居た。近くのテーブルにアラストールが置かれている。



アラストール「目が覚めたか？」

アリサ「うん」

アラストールはアリサが悩んでいることに気付き、問いかける。

アラストール「あの、なのはとはやてと言う少女達が気になるのか？」

いきなり核心を突かれ、動揺を隠せないアリサはおどおどといった感じで短く答える。

アリサ「うん」

アラストール「確かに、我も良く見定めてみたが、簡単に人を傷つけるような人間には見えなかったな」

アリサ「……………」

アラストール「彼女達が言っていたように、すずかという者はアリサに会いたがっているのではないか？」

アリサ「でも、あたしもう後戻りできない……。傷つけちゃったもん。みんなを」

アラストール「我はそうではないと思うぞ」

アリサ「へ？」

アラストール「アリサはとても良い友人に恵まれているということだ。さて、これからどうする？」

アリサ「そういえば、みんなは？」

アラストール「そういえば、見かけないな」

アリサ「まず、みんなを探そう」

アラストールを首に掛け、先ずはいつもの広間に向かうことにした。

いつもの広間が近くなると、ギルと誰かが通信で話している声が聞こえた。

ギル『ジェイル、例のモノは用意できたか？』

ジェイルと呼ばれた人が通信の相手らしい。いつの間にか足を止めて、その話に聞き入ってしまった。

《なのはside》

今、なのは達が乗っているアースラは再び現れたシュツツリツターの元へと急行していた。なのははアースラ内の訓練室でトレーニングをしている。と、そこにヴィータが入ってきて心配そうに声を掛ける。

ヴィータ「おい、少しは休めよ。あと20分したら着くんだからよ」

ヴィータの心配に反し、なのはは止める様子を見せない。

ヴィータ「……………」

ヴィータはただ見ていることしか出来なかった。止めても無駄だと分かっていたからだ。だが、止めても無駄だと分かっているにもかかわらず、強制的にでも止めさせていれば誰も後悔することはなかった。

《ライオットside》

破壊活動が始まって1時間。今までは研究員程度しか居らず、楽に施設を破壊して来たが今回はそう簡単に壊させてくれないらしい。

ライオット「チッ、今までは研究員程度しか居なかったのに……  
……梃子<sup>ていす</sup>搦<sup>は</sup>らせやがるぜ、ミニア！」

ミア「分かっています」

ミアの周りを囲むように、半径5mはありそうな円陣が現れる。

ミア「我を護りし三対の守護神の一つよ。その力を持って神罰を与えよ。龍騎招来、天災地変、我が命に従い、来よ、ヘラクレイトス！」

円陣から銀色の鱗をもつ巨大な龍が現れ、その龍が火を噴くと辺りが炎に包まれる。

ライオット「これで粗方片付いたな。帰るぞ、イルミナ」

イルミナ「ああ、そうしよう」

イルミナの転移魔法で『星黎殿』への帰路についた。

《すずかside》

ここ最近目を覚ました私はとても元気が出なかった。食欲もあまり無い。

すずか（なのはちゃんや、フェイトちゃんや、はやてちゃんは来てくれるのに、なんでアリサちゃんだけ来ないんだろ）

そう、たとえ管理局の管轄化に置かれている病院でも、友人のお見舞いは許してくれるはず。しかし、アリサは一向に来る気配が無い。

すずか「嫌われちゃったのかなあ、私」

一人、上の空になっていた。

《はやて side》

はやて、ヴィータを除いたヴォルケンリッターの三人はアースラの艦橋でリンディ、エイミィ、他のクルー達と第37無人世界に着くまで待機していた。

ユーノはシグナムとはやての依頼を受けて本局に戻っている。

エイミィ「！第37無人世界で大きな魔力反応！恐らく、召喚魔法の類かと思われます」

リンディ「召喚師までいるの！？厄介だわ、少しシュツツリッター

を侮っていたみたいね」

エイミィ「かなりの大型の召喚獣と思われます。．．．．．あれ、召喚獣の反応ロストしました」

リンディ「多分引つ込めたのね。目的地到着まであとどれくらい？」

エイミィ「あと15分はかかります。！、転送魔法使用の可能性があります！逃げられますが、どうします？」

リンディ「ここで泳がせて、本拠地を突き止めるのもアリかもしれないけど、ここは攻勢にでるわよ。みんな、準備して」

エイミィ「ですが、敵の転送先なんて」

リンディ「大丈夫、多分ここら辺で一旦中継を取るはずよ」

エイミィ「なんでそんなことが　ま、魔力反応！？この付近です！」

リンディ「みんな、出撃よ」

みんな「はいっ！」

第25話「再戦」(後書き)

なんか随分間が空いちゃったんだぜ  
ごめんなさいだぜ

## 第26話「脱出」(前書き)

かなりスローペースになってしまったorz



## 第26話「脱出」

《アリサ side》

通信相手との会話は全てこちらに筒抜けになっていた。

ギル『ジェイル、例のモノは用意できたか？』

ジェイル『出来ているよ。50体くらいあれば問題はなかるっ？』

ギル『十分すぎるな』

ジェイル『私はコレを元に、新型を作っておいたがまだ実験段階中でね。』

ギル『そう言えば、戦闘機人なるものを造ったと聞いたが、本当か？』

ジェイル『ナンバーズのことだね。今までに6体造ったが、その内2体は管理局に連れて行かれてしまったよ』

ギル『大丈夫なのか？』

ジェイル『どうと言うことは無いさ。後で回収すれば問題ない。あ、ナンバーズを貸すことはできないからね』

ギル『何故だ？』

ジェイル『どうやら此処の場所がバレてしまつてね。近々、管理局  
の職員が乗り込んでくるかもしれないんだよ』

ギル『局員は全員殺すのか？』

ジェイル『素材が良ければ実験体にするさ』

ギル『随分な自信だな』

ジェイル『それは君の方だろう。管理局相手に戦争を仕掛けている  
ようなものだ。だが、勝機はあるんだろう？』

ギル『当たり前だ。策はある。それに、いざとなればアリサを使つ  
て『天破壊砕』を暴発させれば一瞬で片がつくし、この『星黎殿』  
もある』

ジェイル『アリサとはあのデータにあった子か。だが、その『天破  
壊砕』を使えば彼女は・・・』

ギル『おそらく絶命だな。歴代の担い手では己の放出する魔力に耐  
え切れずにショック死を起こしているしな』

ジェイル『もし死ねば、私のところへ譲つて欲しいな』

ギル『実験体か？』

ジェイル『ああ、それに、何かと役に立ちそうだしな。他のメンバ  
ーはどうするんだ？』

ギル『あんな物、ただの捨て駒に過ぎん。勝手に管理局にでも捕ま  
つていればいいし、死んでくれてもいい』

アリサとアラストールはジェイルとギルの会話に驚愕した。アリ  
サは無意識に一步後ずさつてしまう。その足音が広間に響き、二人  
に気付かれてしまう。

ギル『誰だ!』

ジェイル『この話を聞かれてはまずい』

ギル『分かっている。』

ギルは立ち上がり、こちらに向かって来る。アリサは逃げるため  
に走り出す。

ギル『管理局か?だが、ここ<sup>クリュプタ</sup>の所在は『秘匿の聖室』の効果で探知  
や察知は出来ないはず』

アリサはずっと走っているが、子供と大人の体力には差がある。  
それにアリサは女の子で、ギルは男性だ。体力の差は歴然、すぐに  
追いつかれてしまう。

アリサ『ハアハア、つく』

ギル「アリサか、この話を聞かれましたからには仕方が無い。  
計画実行まで眠ってもらおう」

ギルが術式を発動、掌をこちらに向け波動を放ってくる。

アラストール「アリサ！」

アリサ「くっ」

『夜笠』でギリギリ防御する。

アリサ「自在法、『騎士団』！あたしを守って！」

自在法で馬に乗った騎士を5体出して足止めさせる。

ギル「小癩な真似を！ふんっ！」

アラストール「あやつの力量は分からないが、足止めにはなろう。  
今のうちに外へ出るぞ！」

アリサ「うん」

もう一度『騎士団<sup>ナイツ</sup>』を発動させ、今度は馬を作る。その馬に鞭を打って走らせる。

しばらくすると出口に到着した。

アラストール「どうやら、追ってくる気配は無いようだな。これからどうする?」

アリサ「先ずアレンのところに行く。座標を教えて」

アラストール「承知した」

アラストールから流された座標を設定して、転送魔法を発動させる。

アリサ「間に合ってっ!」

長距離の転送には時間が掛かる。その間にギルバートに追いつかれればおそろく殺されてしまうだろう。

走る足音が、だんだんと近づいてくる。

アリサ「『騎士団<sup>ナイツ</sup>』はもうやられちゃったの?」

アラストール「いや、どうやらヤツは『騎士団<sup>ナイツ</sup>』を振り切ってこちらに来たようだ」

アリサ「もう、あと少し・・・」

転送まであと数秒というところでギルバートがアリサの元へとたどり着くと同時にギルバートはアリサに向けて右手を<sup>かさ</sup>翳す。

ギル「ステイグマータ！」

アリサ「!?!?!?!?!あれ?なんとも無い」

アラストール「今のうちに!」

アリサ「うん」

ギルバートが放ったステイグマータも何の効果も無く。そのまま転送は完了してしまった。

## 第26話「脱出」(後書き)

一応ここでの『ステイグマータ』はギルバートが独自に開発したもので、灼眼のシャナ原作の『ステイグマータ』とは違うので、そのへんよろしくお願いします。

## 第27話「離反」

### 《ギルバートside》

アリサにはあっさりと逃げられてしまったが、逃げられる直前に放ったステイグマータはしっかりと当たったことを確認した。

ギル「ステイグマータはアリサの自在法を解析してミッド式に組み替えたもの……効果に期待しよう」

ギルはさっきの大広間まで戻ると、待たせていたジェイルとの通信を再開する。

ジェイル『どうやら逃げられてしまったようだね』

ギル「ああ、だがこの『星黎殿』を残して行ってくれたのは好都合だ。後々役に立つ」

玉座に座りながらジェイルに返事をする。

ギル「早急にアレの出撃をさせてくれ」

ジェイル『狙いは？』



ギル「アリサ・バニングスだ」

《なのはside》

艦内放送がかかり急いで転送ポートへ向かう。

ヴィータ「少し休んだ方がいいんじゃないのか？」

ヴィータは心配そうな顔をしてなのはの顔を覗き込んだ。

なのは「ううん、大丈夫。何とかしてアリサちゃんを取り戻すよ」

ヴィータ「ああ、そうだな」

話しているうちに転送ポートに到着すると同時に体が光に包まれて転送が始まった。

なのは（待っててね。アリサちゃん）

《ライオットside》

イルミナが中継を取った次元世界で異変が起こった。

イルミナ「結界か！？」

サーシャ「先回りされたか」

ライオット「だろうな」

ミーア「たっ、大変ですっ」

イルミナ「まあ、隊員たちを先に送っておいて良かった。足手まといになりかねないからな」

サーシャ「結界の解析は？」

イルミナ「流石管理局といったところだ。時間が掛かる」

ミーア「あわわわ、どうしましょうっ」

シーナ「時間切れ」

シーナはそう言いつつ指を指す。皆はそれに釣られて目を動かす。

イルミナ「待ってくれそうには見えないな。サーシャ、ミーア後方支援は」

イルミナが指示を出す前に何者かがミィアとサーシャに刃を向けていた。

フェイト「動かないで下さい」

ライオット「詰み・・・だな」

しばらくして仲間と見られる人たちがやって来る。

はやて「ほな、話を聞かせてもらおか？もちろん拒否権なんてもんはないで」

そこで一人の少女が違和感を覚える。

なのは「アリサちゃんは何処なの？」

その言葉に仲間の人たちも気付いたようだ。

イルミナ「アリサはここには居ない。我々の本拠地でまだ眠っているだろう」

はやて「それって・・・」

イルミナ「そうだ。前に倒れてしまっってから目を覚ましてない。相当疲労がたまっていたのだろう」

はやて「そんな」

《はやてside》

はやて「そんな」

はやての声を遮って、アースラからの通信が入る。

エイミィ『巨大な魔力反応が近づいてるよ！アリサちゃんかも！』

その話を聞いたなのはは既に動き出していた。

ヴィータ「おい、ちょっと待てよ！」

ヴィータの声にはやてが気付く。

はやて「ヴィータ、どうしたん？」

ヴィータ「なのはが魔力反応があつた場所に行つちまつて・・・それで、止めようとしたんだけど、聞かなくて・・・」

はやて「今はあまり人員が他に割けへん。ヴィータ、なのはちゃんのもとに行つてきてくれへんか？」

ヴィータ「分かった。すぐ行く」

ヴィータは見えなくなつたのはの後を追つて飛び立った。

## 第27話「離反」(後書き)

涼宮ハルヒの驚愕ゲト!!

待ちに待っただけあって読むのが非常に楽しみだあ

## 第28話「和解と誤解」

《アリサside》

アラストールから受け取った座標をもとにたどり着いたのは、雪の降る丘の上だった。

転送の直後、少し身体が重く感じられた。

アリサ「本当にここであつてるの？」

アラストール「間違いない。ここから北に30kmのところにイルミナの気配が感じられる」

アリサ「そう。じゃあすぐ行くわよ」

アリサが飛行魔法を使おうとしたが、アラストールが待ったをかける。

アラストール「待て。誰か来るぞ」

アリサ「見えてる」

しばらくして、米粒くらいだった影がだんだん大きくなり、そしてそれはみるみるうちに親友の姿へと変わっていった。

なのは「アリサちゃん」

アリサ「な、なのは!？」

そしてなのははアリサの目の前に降り立った。なのはの顔は少し疲れているようにも見える。

なのは「良かった。無事で」

なのはの安心しきった顔を見て、アリサは驚きを隠せずに詰め寄る。

アリサ「な、何言ってるのよ!？あたしはあんたの敵よ!？」

なのは「アリサちゃんは敵なんかじゃない。親友だよ」

アリサ「だってあたしはみんなを傷つけたんだよ!？」

アリサの声はどこか救いを求めるかのような、そんな声だった。だからなのはは言ってやった。もういいと、誰も気にしていないという救いの言葉を



なのは「いいんだよ、アリサちゃん。もう、いいんだよ。間違いは誰にだってあるんだよ？今回はその間違いがたまたま大きかっただけ……」

アリサ「な……のは、うつく……うああああああああ」

いままで張り詰めていたのが解ほどかれて、アリサは泣きながら地面に崩れ落ちた。

なのははそんなアリサを抱きしめるかのように両腕で包み込んだ。

アリサ「みんなが離れていくと思うと怖かった。ぐすつ、なのはあ、なのはあ」

なのは「大変だったね。でももう大丈夫だよ。みんなも心配してるし早く帰ろ？」

アリサ「うん」

二人は手を繋いで一緒にアースラに戻ろうとした。が、そのとき

なのは「！、アリサちゃん危ないっ！」

なのははアリサの手を思い切り引っ張って引き寄せようとする。しかし疲労の所為か、その一瞬、目眩に襲われ、もともとアリサが居た場所に転がってしまった。

ザスッ

肉を切り裂く嫌な音が響く。なのはの胸下辺りに血だけが三角形の形を作って不自然に浮いている。その血が雫となって、白い地面に赤い斑点を描く。

アリサ「なの……は？……なのはあああああああああああああ  
あああ！」

やっと仲直りが出来た親友を傷つけられた怒りで我を忘れ、所構わず『紅蓮の太刀』を乱射する。すると、何も無いはずのところに当たり爆発を起こす。煙が晴れば、そこには機械らしき残骸がいくつも散らばっている。10発くらい撃つと反応がなくなりその後にはただ虚空を斬るだけとなっていた。

そしてアリサは息を切らしながらなのはの元に歩み寄る。

『なのは——————っ！』

突然後ろの方から誰かの叫び声が聞こえる。それはヴィータのものであった。

ヴィータ「よくも、よくもなのはをやってくれたなー！」

アリサ「！？違う、これは」

ヴィータ「うっせー！」

ヴィータの力任せな一振りは不意を突かれたアリサを軽く打ち飛ばす。その衝撃で、アリサの意識は暗い闇の中へと落ちていった。

## 第28話「和解と誤解」（後書き）

間が開いてしまいました。すみません。

これから忙しくなりそうなので、一ヶ月に2〜3回のペースとさせていただきます。

## 第29話「野望」(前書き)

更新遅れてすいません

## 第29話「野望」

### 《ヴィータside》

アリサを撃ち飛ばしてすぐに、なのはの元に駆け寄る。

ヴィータ「なのは、なのはあ！」

なのは「だ・・大丈夫だよ。それに、アリサちゃんは悪くないよ」

ヴィータ「何言って・・・・あ」

冷静さを取り戻したヴィータは周りの様子を見て気付いた。何らかの機械の残骸が散らばっていることに。

ヴィータ「これって？」

なのは「アリサちゃんを狙ってたから、避けようとアリサちゃんの手を引っ張ったんだけどね。疲労がいけなかったのかな？眩暈がしてそれで・・・」

ヴィータ「分かった！分かったからもう喋るな！」

なのはの顔が青白くなってきて声も弱々しくなっている。そ

ここにアースラからの通信が入った。

リンディ『一体何があったって言うの！？』

ヴィータ「なのはがあ・・・なのはがあ」

リンディ『！かなり危険な状態ね。すぐこちらに転送するわ』

ヴィータ「早くしてくれ！」

かなり切羽詰っていたヴィータはアリサのことに気を配る暇もなく、重体のなはと共にアースラへと戻ってしまった。

《アリサside》

目を覚ますと、機械の残骸に埋もれていた。

アリサ「くっ・・・」

体中が軋むように痛い。

アラストール「大丈夫か？アリサ」

アリサ「うん」

アラストール「皆とはぐれてしまったな」

アリサは辺りを見回して雪の上に残っていた血痕に気付く。

アリサ「なのはは！？なのははどうなったの！？」

アラストール「ヴィータと言う少女が連れて行った」

アリサ「そ、そう」

アラストール「これからどうするつもりだ？」

アリサ「ギルバートの計画を潰しに行く。散々あたし達を利用してくれた罪を償わせるためにね」

アラストール「だが、ヤツは『星黎殿』を持っているが・・・」

アリサ「アラストール、本当は分かっているくせに・・・」

アラストール「そうだったな」

アリサ「行くわよ！」

アラストール「承知した」



アリサは炎の翼『紅蓮の双翼』を展開し、その場を飛び立った。

# 《ギルバートside》

ギル「時は満ちた。ついに・・・ついにこの時が来た！」

ギルは両手を天に翳しながら続ける。

ギル「憎き管理局を潰し、この私が全ての支配者となるこの時が・・・」

ギルは駒として使い捨てた者達の姿を思い浮かべて不敵に笑う。

ギル「今まで働いてくれた人形達には、私の勝利の暁には死と言うご褒美をくれてやろう」

『星黎殿』は動き出す。時空管理局本局に向かって・・・。

## 第29話「野望」(後書き)

今回はかなり短いと思いますが、まあ気にしないで下さい

### 第30話「捕縛」(前書き)

インターネットが回復したので、やっと投稿を再開できました。

### 第30話「捕縛」

#### 《イルミナ side》

閉ざされた空間の中には手足を縛られたイルミナ、ライオット、サーシャ、ミアと手足を縛られつつ檻の中に入れられたシーナがいる。そして彼らと向き合うようにして管理局の人たちが椅子に腰を下ろしている。

リンディ「それで、あなた達の目的は何なの？」

イルミナ「管理局の悪の殲滅だ。せんめつ」

エイミイ「信用なりませんね」

ライオット「信用も何も。俺達が破壊行動をしてきた場所を考えてみるよ」

リンディ「確か資料には民間の研究所や工場と書いてあったけど・・  
」

ライオット「ハア!？」

ガタッ

ジャキッ

シグナム「大人しくしている」

ライオット「ヘーヘー」

リンディ「それに、私の話は終わってないわ。さっきはそう言ったけど、あなた達が破壊行動を起こした研究所や工場を管理している企業はすべて存在していなかった。つまり、架空の企業だったと言うことよ」

イルミナ「理解したか？」

リンディ「まあ、時空管理局とは言っても一枚岩じゃない。私としてもそういう所は見るに堪えかねるわ」

サーシャ「それならばこちらの言い分を」

リンディ「だからと言って、私はあなた達を許す訳じゃない。もっと和平的な解決方法があったでしょう？」

ライオット「それが出来ていればどれだけ楽だったか」

リンディ「それって、どういうこと？」

リンディは頭の上に疑問符を浮かべながら訊ねる。

イルミナ「話せば長くなる。ライオット、サーシャお前達もそうだ

ろっ?」

ライオット&サーシャ「ああ」

イルミナ達は洗い浚い包み隠さず話した。ミアやシーナのこれまでの経路も、自分達の過去についても。

シグナム「そんなことを管理局がするはずないだろう！提督も何か言ってください」

リンディ「そうね。流石に信じられないわ。まさか管理局が人体実験したりしていたなんて到底思えない」

イルミナ「皆そう思うから管理局にいいように利用されるんだ」

ライオット「『管理局は正義の味方』、『管理局が悪いことをするはずが無い』そんな固定観念に囚われて平和ボケしてるから見落とす」

サーシャ「私達もそうやって省かれた存在だ。さらに、サーシャという物的証拠も存在している」

リンディ「そうだったわね。もし管理局がそんな存在ならば黙っているわけにはいかないわ。エイミイ、お願い」

エイミイ「調べればいいんですね？了解しましたっ!」

イルミナ「待て!」

エイミィ「ん？」

イルミナ「そんなことをすればお前達もいずれか消される。止めておけ」

リンディ「あなた達が言ったことを信じるのならば確かに危険ね。でも、見過ごすわけには行かないのよ。管理局の一員として」

イルミナ「フツ・・・貴女のような方が管理局のトップに立っていれば俺達はこんな事をしなくても良かったんだがな」

イルミナはそう呟きながら明後日の方向を見つめていた。

《なのはside》

目が覚めるとヴィータがなのはのベッドに突っ伏していた。よく見てみると、すうすうと寝息を立てているようだった。なのはは体を起こそうと試みるが全身を襲う痛みがそれを良しとしない。どうやら本局の病室らしい。

なのは「く・・・っ！」

そんななのはの行動に気付いたのか、ヴィータが覚めたばかりの目を擦りながら辺りを見回す。

ヴィータ「なっ、なのはっ！よかったあ、ホントに良かったよお」

なのはの目が開いていることを確認したヴィータはそのままなのはに抱きついた。

しかし、なのはは誰かを探しているらしく、辺りをキョロキョロと見回していた。

ヴィータ「どうした？なのは」

なのは「アリサちゃんは？」

なのはがそう訊いた瞬間、ヴィータの顔は怒りに染められた。

ヴィータ「あいつならあたしがやった」

なのは「やったって、アリサちゃんをどうしたの？」

ヴィータ「アイゼンでぶっ飛ばした」

ヴィータは当たり前といった表情で言い放つ。が、なのはは驚きが隠せないくらいに驚いていた。



なのは「なんで、なんでそんなことしたの？」

ヴィータ「だって、なのはを傷つけたのはアイツだろ？」

なのは「違うよ。私がこうなったのは全部自分の所為。アリサちゃんはやったんじゃないよ」

ヴィータ「それって、どういうことだよ？」

なのははアリサと和解したことをヴィータに伝えた。それを聞いたヴィータの顔は驚愕のそれひとつだった。

ヴィータ「そんなの・・・そんなの言ってくれなきゃ分かんないじゃないかよ！」

ヴィータはそう吐き捨てると、その大きな瞳の端から少量の涙を流しながら病室から走り去ってしまった。

### 第31話「野望」

《アリサside》

アリサは木々に囲まれた空間の中に立っていた。

アリサ「動き出したわね。『星黎殿』が」

アラストール「うむ、その様だな」

本来ならば『秘匿の聖室』<sup>クリュプタ</sup>の効果で感知されない『星黎殿』だが、その担い手であるアリサには『星黎殿』の位置が手に取るように分かる。

アラストール「『天道宮』を使うのか？」

アリサ「うん。『天道宮』で『星黎殿』に近づければ…」

アラストール「そうだったな。そうすればヤツの野望も食い止められるかもしれん」

アリサ「『天道宮』を出すわ」

アラストール「承知した」

アリサは『夜笠<sup>よがさ</sup>』の懐<sup>ふところ</sup>に手を入れ、そして出した瞬間に何も無かった空中に『天道宮』が出現する。アリサは『天道宮』内部へ乗り込むと、『天道宮』を自身ごと次元空間へと転送させた。

《はやてside》

今は本局の一室で待機状態にある。この部屋にはフェイト、ユーノ、アルフ、車椅子に座っているクロノ、ヴィータを除いたヴォルケンリッターが揃っていた。

現在、本局は将来有望の高町なのはが墜ちたということで少なからず混乱に陥っていた。

しかし、リンディ提督らが『シュツツリッター』の幹部を全員逮捕、保護したこともあって警備の方は完全に緩みきっていた。

はやて「結局、アリサちゃんおらへんだなあ」

シグナム「それでしたら先ほどヴィータがアリサを見たといっていたが」

はやて「それはホンマか!？」

シャマル「え、ええ、確かにそう言っていましたよ」

はやて「何でそんな大事なことはよ言わなかったん？」

ザフィーラ「実は、アリサを見失ったと・・・」

そんなはやとヴォルケンリッターの会話に他の4人も食いかかった。

フェイト「見たんだね？」

シグナム「私は実際には見てはいないが、ヴィータがそう言っていたからな。そうなんだろう」

アルフ「取り逃がしたって、どういうことだい？」

その質問に、シャマルは答えにくそうに答える。

シャマル「実は、その、ヴィータちゃんがなのはちゃんを傷つけたのをアリサちゃんだと早とちりしちゃったみたいで・・・それで・・・」

クロノ「ギガントハンマーでぶっ飛ばした、というところか」

シグナム「全く持ってその通りだ。今回はヴィータの直情的な部分が裏目に出たな」

ユーノ「でも、過ぎてしまったことは仕方が無いよ」

はやて「せやな。今更ヴィータを責めたってアリサちゃんが帰ってくるはずないし」

クロノ「それもそうだな。今はアリサの保護を最優先に考えよう。  
それからユーノ」

ユーノ「なんだい？」

クロノ「『天壤の劫火』アラストールのことについてもっと詳しく調べてくれな  
いか？」

ユーノ「お安い御用だよ」

そう言うときユーノは無限書庫へと向かった。ユーノが出て行った  
あと、少しの間の静寂。それを破ったのははやてだった。

はやて「どうやら管理局の皆は『シュツリッター』の幹部を全員  
逮捕、保護したことで気が緩んどるけど。まだや」

クロノ「そうだ。まだギルバート・D・アークライトの身柄を確保  
していない」

はやて「次で最終決戦になりそうやな」

《ギルside》

ギルはジェイルと連絡を取り合っていた。

ギル「そろそろ目的地だ。新たに送られてきたアレ、感謝しているよ」

ジェイル「ハハハ、それは何より。君が管理局を潰してくれると助かるよ。いろいろとね」

ギル「フツ、お前の望みは最高評議会を潰すことだろうか」

ジェイル「本局が墜ちれば最高評議会も死ぬ。君は本局を落すつもりだろうか？」

ギル「まあ、そうだがな。それに、イルミナが自分達の部隊員を優先してこちらに転送してくれたからな、兵士の数も十分に足りている」

ジェイル「本局が墜ちるのを楽しみにしているよ」

ギル「ああ、では通信を切るぞ」

ジェイル「ああ」

ギルは既に見えている時空管理局本局を眺めつつ呟いた。

ギル「やっと、やっとこの時が来たのだ。俺を作り、そして反逆者に仕立て上げた奴等に地獄を見せるときが！」

### 第31話「野望」(後書き)

誤字、脱字等がありましたら指摘お願いします。

第32話「救援」(前書き)

まさかの連続投稿



### 第32話「救援」

《はやてside》

ドーンと言う音と共に、管理局本局が揺れた。

はやて「なんや！？地震か？」

クロノ「馬鹿を言うな。ここで地震なんて起こるはずないだろ」

突然部屋に響いた震動に慌てふためいていると、勝手に通信回線が開く。

ギル『御機嫌よう、管理局の諸君。私はギルバート・D・アークライト。早速だが、君達には私の作り出す世界の生贄となってもらおう。貴様らの犯してきた罪、地獄で償うが良い！』

そして、通信は途絶えた。

すると、突然部屋の入り口のドアが破壊され、デバイスを向けた人達が入り込んで来る。

男「動くな！貴様らのデバイスはこちらに渡してもらおう」

はやて達は抵抗することも出来ず、その指示に従うことしか出来なかった。

《アリサ side》

アリサ達の目前には既に戦闘が始まっている本局の様子が窺える。

アラストール「遅かったか」

アリサ「大丈夫。まだ間に合うよ」

アラストール「アリサ、『星黎殿』が・・・」

アリサ「管理局に突っ込んでるわね。全く、どうして他人<sup>ひと</sup>の物がそんなに粗末に扱えるのかしら」

アラストール「・・・・・・・・」

アリサ「行くわよ」

アラストール「心得た」

アリサは『天道宮』の進路を『星黎殿』へと向けた。

《イルミナside》

先ほどからずっと外が騒がしい。そう感じたイルミナはその場に居合わせた全員に問いかける。

イルミナ「さつきから外が騒がしいと思わないか？」

ミリア「そ・・・そうですね」

サーシャ「ここから動くことができればいいのだが」

サーシャはそう言いつつ、自らを束縛する縄を解く手段を求めて辺りを見回す。すると、静かに寝息を立てているライオットに気が付く。

ライオット「ZZZ・・・」

サーシャ「全く、こんな状況で寝るヤツがいるか」

呆れたといった様子で俯うつむきながらサーシャが呟く。と、その時、部屋の扉が爆風と共に吹っ飛び、寝ていたライオットが飛び起きた。

ライオット「な・・・なんだ!？」

爆発の後、黒煙の中から出てきたのは三人と4機。三人の方は、イルミナ達の部下の人間で、4機の方は楕円を引き伸ばしたかのような形の機械だ。

サーシャ「助けに・・・来てくれたのか？」

サーシャのそんな疑問に、一人の男が前に歩み出て

男「貴様らはここで始末する」

と、冷徹に吐き捨てた。その言葉に誰もが驚きを隠せない。男に一番先に噛み付いたのは、やはりというかライオットであった。

ライオット「てめえ、どういうこった！？てめえらは俺達の部下じゃないのかよ！？」

男はそんなライオットを見下しながら

男「貴様らなどにはもう利用価値が無いとギルバート様も仰っていた。だから始末するのだ」

と、言いつつ、後ろの男二人にも指示を出す。指示を受けた二人はデバイスをこちらに向ける。

イルミナ（ここまでか・・・）

イルミナはただデバイスの先に集まりだす光の玉を見ていることしか出来なかった。

イルミナ「・・・・・・・・すまん、アリサ」

と、小声で呟く。そして、男二人のデバイスの先から光が放たれた。

《はやてside》

今、この部屋では、はやて達を取り囲むように男達がデバイスをこちらに向けて立っている。その内の一人がどこかと連絡を取っているようだ。

男「確認が取れた。ここに居るのは八神はやてとそのヴォルケンリッター3名、フェイト・テストロッサ、クロノ・ハラウン、リンディ・ハラウン、エイミー・リエッタの以上8名だ。その内、八神はやてとフェイト・テストロッサを『星黎殿』に連れて行く。

それ以外は始末しろ。手が空いている者は高町なのはと月村ずずかを探せ！」

「了解」

男達は的確に、はやてとフェイトを拘束し残りの6人にデバイスを向ける。

はやて「やめて！」

男「ハッ、五月蠅いガキだ。やれ」

シグナムたちに向けられたデバイスに、その一撃でも当たれば致命傷となる光が集まっていく。そしてそれが放たれようとした刹那、赤い炎が男達を包み込み男達の意識を確実に刈り取っていく。

はやて「何や!？」

炎が放たれた後を追うとそこには炎の翼を生やしたアリサが居た。

フェイト「アリサ、助けに来てくれたの？」

フェイトの質問に、アリサは頷く。はやてとフェイトに近づいた

アリサは、二人を縛る縄を『贅殿遮那』で切り落とす。

アリサ「アレンは何処？」

その質問に答えたのはリンディ。

リンディ「地図よ。ここがイルミナさん達が拘束されている場所」

リンディは管理局内の地図をアリサに渡す。

アリサ「ありがとうございます」

そう言い残すとアリサは走り出していった。  
はやては男が持っていた自分達のデバイスを

はやて「私達もこうしちゃいられない。シグナム」

シグナム「はい！」

はやて「ザフィーラはここでシャマルと一緒にクロノちゃんとリンディ提督の警護や」

ザフィ「承知した」

シャル「ええ、分かったわ」

はやて「行くで、シグナム、フェイトちゃん」

シグナム「はいっ！」

フェイト「うん」

はやてとシグナム、フェイトはバリアジャケットを展開し、部屋から飛び去った。

《イルミナ side》

男達のデバイスから放たれた弾は、炎の壁によって遮られた。

男「な、なんだ!？」

イルミナ達はこの炎に見覚えがある。この炎は間違いなくアリサのもの。

アリサ「助けに来たわよ、アレン」



### 第32話「救援」（後書き）

誤字、脱字等がありましたら指摘お願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6998p/>

---

魔法少女リリカルなのは～FlameS～

2011年9月28日21時22分発行